

# 第14回銀華文学賞発表

## 銀華文学賞

第一四回銀華文学賞は、日本全国から、昨年より七〇篇以上多い二六七篇の御応募をいただきました。まことにありがたうございました。おかげさまで今年はさらに多彩な内容となり、受賞数も増え、豊かな結果となりました。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八寛正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに結果を発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞のみ掲載させていただきますが、奨励賞など秀でた作品は次号以降に順次掲載の予定です。

申し訳ございませんが、コロナウイルスの影響が尾をひいた事情から、授賞式・祝賀会は今年度も見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただき、枚数、締切、審査料など他はすべて同じに募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

## 最優秀賞

### 「隻眼の熊」

塩崎憲治 (山形県米沢市)

### 「闘牛の絆」

勢 隆二 (大阪府柏原市)

## 優秀賞

### 「目撃者」

長野正毅 (東京都杉並区)

### 「ウイルスと木偶廻し」

菊野 啓 (徳島県徳島市)

### 「無低の住人と少女」

神郷愛光 (和歌山県和歌山市)

### 「災禍の向こう」

小柳義則 (佐賀県小城市)

### 「エニシング・ゴーズ」

室町 眞 (東京都杉並区)

## 奨励賞

「遙かな海」 平安名尚 (三重県名張市)

「入学記念写真」 寺村健三 (福岡県北九州市)

「たましずめ」 荒井りゆうし (東京都練馬区)

「三月十九日」 小倉孝夫 (富山県黒部市)

「夫婦力」 星野 透 (埼玉県所沢市)

「D&Sの功罪」 高橋惟文 (山形県山形市)

「一時帰宅」 ほり 啓 (高知県高知市)

「共生花」 幸祉豆杵 (愛知県名古屋市中)

「ミルクレディ」 佐藤 勉 (京都府京都市)

「ヒバカリ」 山田 明 (千葉県流山市)

「残照」 梶川洋一郎 (広島県広島市)

佳作

- |               |       |             |       |
|---------------|-------|-------------|-------|
| 「切っさし」        | 中村正弘  | 「ある再会」      | 野原めぐみ |
| 「波の音」         | 七里彰人  | 「流砂」        | 深見恵美子 |
| 「ペランダにて」      | 山本桂子  | 「神無弥」       | 飛葉哲朗  |
| 「夏美の家」        | 黒崎つぐみ | 「そこに吹く風」    | 畑田    |
| 「silent love」 | 賀来ふゆ子 | 「あじさい」      | 工藤阿大  |
| 「海上都市」        | 純子    | 「無言歌集」      | 辻陽子   |
| 「戦争孤児」        | 満洲旅人  | 「学生街で」      | 山崎ゆのひ |
| 「美女峠」         | 目黒広一  | 「夜泣く子」      | 吉田圭   |
| 「槿花の夢」        | 大和川義之 | 「朝のパズル」     | 杉木節   |
| 「ゲリマンダーの写真帳」  | 守尾六   | 「星ノ逢フ夜」     | 平ゆりか  |
| 「海まで走る」       | 高山恵利子 | 「破調」        | 野沢薫子  |
| 「千寿苑」         | 西山慶尚  | 「ラバーダック」    | 半崎輝   |
| 「佳日日和」        | 折口真   | 「光の射す方へ」    | 赤井晋一  |
| 「僕の彼女」        | 村重知幸  | 「ゑいじよろうしゅう」 | 櫻間静   |

選評

ベテランが飛躍

五十嵐 勉



今回の銀華文学賞は、ベテランが飛躍の輝きを見せたことに尽きる。およそ最優秀賞は、奨励賞や優秀賞をいくら重ねても、それだけでは届かず、プラスアルファの跳躍がないと達しないものである。当選の勢隆二氏は七十九歳、同じく塩崎憲治氏は七十二歳——古稀を超えても作品の質に飛躍前進があることは、実に喜ばしく、年齢を超えてなお技量も精神の骨格もアップするものであることを示して、感に堪えない。銀華文学賞の意義を体現するものである。

奇しくもどちらも動物を主軸にしている、人間の生活に近接した生き物を主人公にしている。その息遣いや血の滾りが届いてくるダイナミックな作品になっている。

河林満賞の移設について

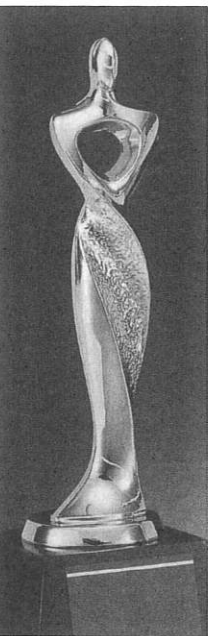
河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



勢隆二氏の「闘牛の絆」は奄美群島の徳之島の伝統闘牛に生きる家族を描いて、営々と伝わる血の躍動を喚起する。飼い主の期待を背負って牛が全身全霊で押す闘牛シーンは思わず手に汗を握る迫真力がある。これは作っただけでは書けない、実際にそのシーンに立ち会った者の筆によるリアリティである。牛の筋肉が隆々と動き、鼻息が熱く聞こえてくる生々しさを有している。また、現代の様々な事情を乗り越えてそれに情熱を傾ける人々の純朴ゆえに力強い一途さがいい。我々が現代生活で忘れていた原初の動物との交感が息づいている。読み終わって、闘いに生きる牛の存在感と、それに縋り、生活を賭して燃やす情熱の純粹さが、単純な命の尊厳を見せてくれる。徳之島の風土も生きている。よくその伝統行事をこういう形で結晶させた。その努力と、粘り強さを称賛したい。

もう一つの当選作塩崎憲治氏の「隻眼の熊」は特異な題材に、すばらしいストーリーを組み合わせて、感動的な作品に仕上げた。本流に入って行くまで少し遠回りになっているが、子熊が出て来てからは、悲劇のクライマックスへと一気に駆け昇っていく。動物どうしの生きる愛情の交感が、人間社会と動物の乖離の割れ目で殺し殺されるものに分かれる宿命が、あまりに切ないラストの激突へ追い立てる。最後は庇い合うように、あたかも心中するように、二つの体が谷底へ落ちていくシーンは劇的である。そして同

時にここに人間社会と獣の敵対の矛盾を超えて、動物どうしの深い愛情が昇華されて胸に鮮やかに残る。愛によって生きることできたそれが、動物の魂として宙へ昇る。それが胸に感動として湧き起こってくる。よくこれを結晶させた。また一度死に絶えたと思った愛犬が再び戻ってきてそこでまた息を引き取る姿も、人との繋がりの中で生きるものの愛しさを伝えて、胸に迫る。現今の機械や制度の便利さに真の重要なものを忘れがちになっている我々に、あらためて原初的な尊いものを突き付けてくる感動作を成立させた。拍手を送りたい。

優秀賞は長年筆を研いだ技量のある書き手が並んだ。題材は高校時代から老年までバラエティに富み、老年、老年の真の豊かさを示している。菊野啓氏の「ウィルスと木偶廻し」は方言をリズムよく交えた流れのよいモノローグの文体に、現代のコロナ禍をうまく交えて、独特な世界を作り上げている。むしろ現代の流行としてのコロナ騒ぎを、冷静にシニカルに見つめて、昔からのよそ者を隔離する閉鎖的慣習と比べて、現実の世界の浮薄性に切り込んでいくところに鋭さがある。老年の意識に沿って過去の厚い堆積から意義深い洞察を紡ぎ出す技量は高い。「人は自分の死を影絵のように引きずりながら歩いていく。やがて足が一步も前へ進まなくなり、背後から黒い影に覆い被ざられて影そのものになる。影は不可視の微粒子となって空气中に

霧散し、また別のものへと変化する」という文章などはドキリとする掘削である。また「つらいことも気に食わんこともあったけれど、いつもそばにいた人たちとのあいだには、良かれ悪しかれ歴史が生まれる。膨大な記憶で構成されたそれを頼りにウメコは今を生きている」という部分なども、普段から考察を深めていないと出てこない秀でた文章だろう。マスクとシールドを付けた正月の「木偶廻し」で最後を締めたのは秀逸で、ここも洗練された腕を示している。ただ、終わり部分で現実の表象の言葉を並べた箇所は過多によって羅列になってしまっているため、点を減じ、修正をお願いした。勇み足も目についたところがあるが、総じて高い技量を確認した。

長野正毅氏の「目撃者」は高校時代の親友の特異な存在を浮かび上がらせた鋭敏な小説である。確かに老年になって初めて遠い過去が鮮明になり、新たな意味を有して再現されてくることがある。むしろ深まりを得るがゆえにより鮮烈さを増す。この作品はそういう面における積極的な回顧であり、文学の可能性の一端を示している。母子家庭の孤独な主人公に、受験校のクラスでやはり孤独な一人が近づいてくる。母親の再婚相手が医者で、裕福な生活を保証されている。食堂でもついで食事をするその贅沢な暮らしに触れながら、しだいにその屈折した世界の深みに入っていく。常識的な社会への反抗の牙がさらに変異して、学校

の英語女性教師とラブホテルに入るまでになったその現場を、主人公が目撃するところで、小説は終わっている。成長と社会との間の亀裂の断面を見せてくれる鋭利が際立った。

神郷愛光氏の「無底の住人と少女」は、生活保護よりもっと深刻な世界の存在を示してくれている点で、異色でありそこに生きる人々の生態をつぶさに描く筆致は手堅く、重なりアリティを醸し出している。経験に近いものがないとこれだけ書けないだろう。死んだ同僚の愛児を見守る展開はおもしろく、童話を聞かせるストーリーが救いになっていく結末は明るく希望に繋がっている。最後の部分は修正によって改良されたが、少しのアドバイスで花開く力量を持つっている。さらに大きな題材に挑戦してもらいたい。

「災禍の向こう」（小柳義則）と「エニシング・ゴース」（室町眞）の評は他の選考委員に譲る。

奨励賞も充実していて、復帰の書き手にもいい作品が目立った。星野透氏の「夫婦力」も熟年離婚になろうとする夫婦が最後に二人の住んでいた地を訪れてかろうじて別れを踏みとどまるストーリー展開に、地味だがよく煮込まれていて、不思議な読後の妙味が残る。復活を喜びたい。高橋惟文氏の「D&Sの功罪」も氏らしい温かみが匂い立つ作品で、久々に人肌の柔らかな機微に触れた気がした。ただ、「D&S」という言葉がやや抽象的で定着性が弱い分、

イメージの結びが弱く、主題を反映しにくくなっているのが惜しまれた。

佐藤勉氏の「ミルクレディ」は、複数の人といつしよに食事できない会食恐怖症の恋人を更生させる話である。題材が変わっていて、こんな病気もあるのかという興味に誘われて引き込まれていく。その過程で、愛情を貫く姿勢が好感を呼ぶ。読み終わってみればシンプルな恋愛譚ではあるが、魅力のある作品となっている。この作品は佳作の「僕の彼女」（村重知幸）と「silent love」（賀来ふゆい）と並んで、今回の三つの純愛好小説とも言える。「僕の彼女」は死んでもなお愛が伝わることを主軸に、また「silent love」は、遠くでただ見えるだけの関係が実際の恋愛に繋がっていく伝播を主軸に流れていく。どれも素朴ではあるが、ひき合うものの姿を描いて、胸に快く残る。

「ヒバカリ」（山田明）は愛人に生活を支えてもらっていた画家の父親の死をめぐって、複雑な家族の思いを描きながら、最後にやはりはかなく死んでいく副主人公の娘の宿命を不思議な味わいで浮かび上がらせた。その手腕の高さは目を引くが、タイトルの「ヒバカリ」の蛇からの由来がやや唐突で、しつくりこない恨みがある。趣の深さは修練を窺わせる。

梶川洋一郎氏の「残照」は、なかなか嫁がない娘と暮らす、はかなさの漂う晩年の生活を手堅く描いて、そこはか

当選作勢隆二氏の「闘牛の絆」は、一トンの牛同士の間牛のシーンが圧巻である。この場面だけでも、当選に値する。この迫力は、想像では書けないもので、おそらく身近にあったのだろう。優れている。

当選作塩崎憲治氏の「隻眼の熊」も、犬と熊の話で銀華文学賞では、珍しい題材である。前にも魚の話を書かれていますと思われるが、興味が向く方に創作されているのは良いと思う。犬とヒグマの話となると昔読んだ「牙王」という漫画を思い出す。戸川幸夫の原作で、石川球太の絵で、動物への愛情が感じられる作品である。塩崎氏も今後、動物を絡めた作品を期待したい。

優秀作室町眞氏の「エニシング・ゴーズ」は、彼の二系統ある作品群の一つで、自分が育った時代を描いている。前に読んだものよりは随分良いと感じる。それを女性の視線から書く等室町氏らしさは出ていると思う。この作品は、確かに男が書くとしたら無理があり、モデルがあるのかと思うが、自分や友人の経験と時代の雰囲気を描いている。ただ、興味を引かれるのが、時代のカオスと、アナーキーの時間から、人々が、家庭や普通の生活に戻るのが新しい。残念ながら無茶苦茶でも自由な時代は長く続かない。父や、家や、生活に押しつぶされる自分がある。到着点はまだ、見えない。室町さん、もう少し頑張ってください。

優秀作菊野啓氏の「ウィルスと木偶廻し」は問題作であ

とない微妙な味を醸している。「命の浮かび」が感じられる。引き合う父娘と、離れなければならない宿命とが死んだ妻を合間にして揺れている流れがいい哀切を織っている。

「三月十九日」（小倉孝夫）は、息子の癌の最期を伝えて、生々しい実写小説となっている。医師で人工肛門を嫌う息子が、口腔癌から大腸に転移しても民間療法で治そうとするものの、結果的に悪い方向へ行き、治療に行った東京でそのまま最期を迎えるまでを克明に描いている。最後がやや描写が足りないながら、緊迫感を帯びた進行は、読ませた。全体に充実した今回の銀華文学賞であり、熟年の豊かな体験がそのまま作品の豊饒となっている。次回もそれぞれの多様な経験世界の掘り起こしを期待したい。

## 動物もの二作

### 大高雅博

今回は、前年の新人賞に刺激されたためか、力作が揃ったようだ。

当選の二作は、動物もので、動物が良く描けた作品は少々点が甘くなるようにも思うが。



る。コロナ禍、東京から徳島に戻ってきたメグミに「何故、帰ってきたのか」という悪意のある張り紙が出る。祖母のウメコは、弟となる養子のヒデオとその父のことを思い出す。ヒデオの父は、恐らくハンセン氏病で、その頃は特效薬も無く、弱い伝染力しかないことも知られておらず、差別の対象となっていた。四国の巡礼には、そのような病を持った人々が歩く特別の道があったという。「訳ありの巡礼だけが人目を忍んで往き来する、遍路転がしとも呼ばれる裏の参道」から出てきた親子を、ウメコの父親は、畜舎の小屋でかくまうが、近所で噂になり、いじめられ、村八分となる。ヒデオの父は一人裏の参道を進み消えてしまう。時代が変わっても差別はある。同じ事の繰り返しであり、外国人に対する新しい差別も生まれている。正月の「三番廻し」という芸能も、マスクとフェイスマスクをしなからである。それでもウメコは「見られたら十分だ」と言う。

優秀作小柳義則氏の「災禍の向こう」は現代の状況を背景としている。九州の作り酒屋で川の氾濫で、浸水被害があり、致命的な被害を受ける。親友の助けもあり、再建しかけたときにコロナ禍に合う。何とか酒造を続ける決意をしたときに、助けられていた居酒屋を経営する親友が客にコロナ患者が発生したことに困り、うまくいかなくなり自殺する。やりきれない話であるが、ありそうなことであり、現実にはすでに起こっていると思わせる作品である。

神郷愛光氏の「無低の住人と少女」も今日的な内容を持っている。この世には貧困ビジネスと称するものがあり、生活保護費を預かり、少しの小遣いを渡すだけで、小さな部屋に縛ってしまう。この作品に出てくる無低（無料低額宿泊所）は、人生を諦めざるをえない人々が暮らしている。主人公は、そこに入っている男から、近くの養護施設にいる娘の話聞き、託される。男は死に、主人公は、その娘に会いに行き、希望を見いだす。なかなかの作品だと思う。今回の応募作で気になったのは、息子さんと、娘さんが亡くなることで発生する話が幾つかあったことだ。自分の子供が亡くなることは耐えられないと思う。小説になった場合、それが事実であることもあり、軽々には評価出来ないが、小説である以上、悲しみだけではいけないと思う。客観視する必要がある。

奨励賞小倉孝夫氏の「三月十九日」も息子の死を扱っている。普通と違うのは、父も息子も医師などの医療関係者であるということだ。人工肛門を嫌がった息子が民間療法に走り、そして亡くなる。父としてまたは医者として、無念だったと思われる。その気持ち「三月十九日」という題名に現れている。悲しい作品であるが、伝えたかった気持ちは理解できる。

他にも奨励賞には、常連の高橋惟文氏「D&Sの功罪」等、興味深く読ませていただいたが、詳細は他の選者にお任せして、実は、今回は佳作、入選の中にも良いと思われる作品があり、それに触れたい。黒崎つぐみ氏の「夏美の家」である。九州の山間部の集落到に、母親と暮らす夏美は、余り恵まれた環境にあるとは言えず、友人もいない。無人の稲荷神社が「夏美の家」だった。あるとき、大水がでたあと、神社に行くと、段ボールが積んであって、その中にリリアンがあり、それを学校で遊んでいると、女子が見つけ、それが縁で友達が出来ていく。段ボールは不法投棄で、犯人がわかり、荷物は取り除かれるが、夏美の家は残り、そこで友人と遊ぶ。確かに、衝撃的な話ではなく、地味な内容であるが、後味が良く小説らしい小説だと思いい好ましく思った。

伊和七種氏の「ふわりと浮かんでどかんと入ってきた」喉頭癌の男が、生と死の世界を彷徨うというような怪談でもあり、荒唐無稽な話である。実はこの作品を読んだとき安部公房の最後の長編小説「カンガルーノート」を思い出した。主人公の死出の旅路を公房調の想像力にあふれた作品である。それを考えていると、この作品は、ちよっと、宗教色が強すぎるのかもしれないと思うようになった。最初に現れる新興宗教は単に占い師くらいでよいのかもしれない。神社はすでに異界で、鳥居も異形のものの方がわかりやすくなる。神は異界の鬼で、少年の形をしている鬼には、角のようなものが生えていてもよい。最後は、少年は、

だけで誇ってもよいと思う。今年も良い小説に巡り会えた感じがする。しかし、満足せずにもう一步先に進んで下さい。

## 入選

昔の自分となつてはいるのだが、この小説は何でもありなので、その設定でかまわない。喉頭癌で、生死の境を巡る冒険譚のほうが分かりやすいかもしれない。ただ、この人の想像力は中々のものである。

今年も良い小説に巡り会えた感じがする。しかし、満足せずにもう一步先に進んで下さい。

- 「響め牡蠣」 宮川行志  
 「牙子のメス」 高尾周一  
 「異邦のひと」 大島直次  
 「私には帰る家がない」 白河葉  
 「住むということ、生きるということ。」 こんどうよしひで  
 「ふわりと浮かんでどかんと入ってきた」 伊和七種  
 「さいなら」 八月朔日壬午  
 「天国ばかり地獄ばかり」 石川 侃  
 「つひのすみか」 君津佳孝  
 「琴線」 友 修二  
 「演歌の港」 朝川あきら

- 「死期」 寺田秀穂  
 「プロگرام」 深井健二  
 「薫風」 根岸幸晏  
 「父の軍隊手帳」 笠置英昭  
 「雷鳴」 藤川とみ枝  
 「高野聖の謎」 有汐明生  
 「進路変更」 荒圃窮策  
 「柔らかな手」 益田和則  
 「ドッグパドル」 大谷 努  
 「かげろふ」 伊吹耀子  
 「十二月十四日」 悠希マイコ  
 「スタートライン」 小岩井友理



## 印象に残った作品

小浜清志



当選作となった「闘牛の絆」と「隻眼の熊」は共に動物を扱った作品でこの二作とも筆力が圧倒的な勢いをそなえている。当選おめでとうございませう。

さて、当選には至らなかったものの印象に残った作品を紹介したい。

まず初めに「三月十九日」である。直腸ガンに冒された息子の義孝を巡る家族間の話である。歯科医師である中倉の息子も娘と共に同業であるから医学には精通している。したがって手術をすれば完治できる病であるが、肛門に近いため手術をすれば必ず人工肛門になるという。義孝はそれを絶対に嫌だと言い手術を拒否し、民間療法を選択することになる。中倉は義孝が読んだ民間療法に関する数冊の本に眼を通したが、どれも経験の積み重ねに過ぎず、科学的根拠があまりにも少ないことが難点といえた。だが義孝はいろいろな民間療法を試みた結果、プラズマ療法に行きついた。直接体にも照射すると癌細胞が死滅したとの報道

をひたすら話す中田桃子の真意をわかることもなく別れるのだが、バカ真面目な態度しかとれなかった自分を反省する。この小説は実際にあったことであるかもしれないが、書く前にもっと構成をしっかりと練るべきであろう。再会の内容も事実を描くのではなく、作品の形になるように工夫すべきだった。

「星ノ逢フ夜」康祐と司の幼い頃からのつながりが変化していく作品で、青春のあわい心情を映し出している。美沙子の出現で二人の関係は揺れだし司がバイクの事故死を遂げると。五年ぶりに康祐は司の故郷に出掛け司の死の真相をつきとめる。事故当日の夜、司が美沙子を訪ね「好きな人いるか」と聞かれ「私はいら」と答える。すると司は「ごめん、美沙子ちゃん、おれ、悪いことしたからさ、美沙子ちゃんの好きなやつ連れてくる」と言い残してヘルメットをかぶって出かけ事故に遭って死んだ。そして、事故現場を見に来た康祐と、花をたむけにきた美沙子は出会う。それはあたかも司が導いてくれたような再会であった。

「夫婦力」夫婦の亀裂が別居までに広がっていったある日、二人してかつて生活をしていた場所を巡ることになる。新築アパートでの思い出が甦る。次に移り住んだのが同じ市内の公団住宅でそこに訪れても思い出はあふれてくるが、よりを戻したいとはまったく思わない。そしてかつての住人と何十年ぶりに会い少しづつ気持ち揺れてい

があったという。そして、義孝はプラズマを照射するために富山から東京に通いだした。意外なことに施術を受けた日から数日は体調も良く、普段と変わりなく中倉と一緒に患者を診たりしていた。それが、十日位が限度で度々上京するようになった。十二月十六日まとめて施術を受けるということで義孝が東京に向かう。クリスマスまでには帰るといふ予定であったが、十二月二十六日の夕方に東京の病院から電話があり、義孝が救急車で運ばれ緊急の手術を受けたと告げられた。そこから事態は急変して結末を迎えるのであるが、作者の深い悲しみがずっしりと沁みこんでくる。もう少し掘り下げればもっと上位に行けた作品だった。

「あじさい」この作品も子供の死を描いている。十七才の娘を失った父親の心情が痛いほどに伝わってくる。交通事故故当日の病院での出来事などが深い悲しみをたずさえて淡々と描かれている。葬儀会場に現れた加害者の両親を巡る周りの反応なども痛々しい。加害者に対する父親の気持ちをもっと書いていければもっと深みが増しただろう。

「ある再会」教師をしていた鍋木育子の元にかつての教え子だったという中田桃子が会いたいとの連絡をくれる。老人ホームで暮らしている鍋木育子は心よく会うことになる。しかし、遠い昔の記憶にもない話を中田桃子は次々と喋るのだが鍋木はまったく思いつけない。教師であった鍋木に詫言をもとめるのでもなく、小さな叱責のあったこと

## 多彩な題材と手応え

八寛正大



夏の猛暑酷暑、そして急に気温が落ちたりまた上がったたり……朝晩だけでも十度以上の温度差があったりで、秋になって体調を崩された方が多いのではと。くれぐれ

命を大切に、自宅での待機……といくら言われても、家の中に居れば安全安心かと言うと、実はそうでもなく、人間は外界と内界のバランスを取って生きている実存。

したがって、内界ばかりで安全なら、悪夢を見たり代謝を損なう故の病気にはならないはず——しかし事実はそんなことはなく、自閉することによって溜まる孤立のストレスは気分を落とさせ気を病むまでに繋がったりする。また急に外へ出て足を怪我したり腰ひざを痛めたり……と。適度にバランスを取り関係の中で動き回ることこそ、他ならぬ健康を維持する要諦なのだを改めて気付かせられる。

コロナウィルスがようやく下火になり、でもまだ冬に第六波が懸念される中、銀華文学賞選考会は、無事行われた。以下感想を述べておきたい。

### 「闘牛の絆」

ずばり、徳之島の闘牛の話。琉球王朝時代から五百年の歴史のある闘牛。主人公は技師わざと呼ばれ、還暦を過ぎた男。闘牛の場面が、実に臨場感を持って描かれ引き込まれる。「ワッセ、ワッセ」「ハイヤー、ハイヤー」の声が本当に聞こえてくる気がする。しかし、期待をかけた跡継ぎの息子が、台風により発生した土石流に吞み込まれ亡くなってしまふ。その悲しみを乗り越えて、今度は孫がせむ勢子として立つていくことへの期待感で終わる。まさに闘牛に人生を掛けた男の生涯が、その臨場感抜群の舞台の上で見事に演じられた作品と言えよう。

### 「隻眼の熊」

前回「ラストオーダー」で優秀賞を獲た作者の小説。今回はグッと自然に近づいた内容となっている。

主人公はカールという二代目の狩猟犬を飼っている。しかし、主人公はヒグマを捕え倒すことより、何か神秘的な命への、ある種畏敬の念を持っている気がする。

〈突然、地響きを上げ、突進してきた。……ふと、熊の目に憎悪の色がないことに気づく。……目の奥に、刃とは違う、柔らかな光が見える。勇は、雨に打たれる十勝石のよう売っていないイラストレーター唐橋さん、彼らは主人公がバイトしていたスナック『エニシング・ゴーズ』の常連客だった。……今の夫との別れに際し、そんな彼らとの交情を思い起こしつつ、まだ二十年くらいはあるだろう己の余生について思いを馳せる……まさに味わい深いジャズの名曲を聴いたような、人生というもののスイングが残った。

「目撃者」〈何十年も昔のくささいな出来事が、じつは人生において決定的な意味をもっていたのだと解釈できる余裕を持てたのは、それなりに幸せなのかもしれない。〉そんな感懐ではじまる、ちよつと不思議な小説。母子家庭で、母親に期待を掛けられて育った主人公は、中高一貫の私立の男子校に入る。そこにちよつと変わった転校生が入ってくる。

その高校の若い女教師に皆憧れを持っていたのだが、やがてその転校生と女教師がラブホテルから出てきたのを主人公は目撃する。一方、権威的で人望もあり（その女教師ともできていたと噂のあった）男性教師は事故で他界する。ちよつとクラシクな「初恋」憧れ系の小説だが、大人の世界を垣間見せるように読者を引き込んでいく——その筆致がなかなかだ。そしてラストに打たれた。へなにもかも消えてしまったが、私だけはここにおいて当時のことを記憶している。とりわけ生涯ただ一人の親友だった彼が、星（女教師）と腕を組んで親しげに歩いていた夕暮れどき

うな目に、どうしても刃を浴びせることができなかった。……勇は思い出していた。なぜあるとき鈍を振り下ろさなかったのか。……恐怖が畏怖へと変わった瞬間、自分も一頭の獣となった。崇高なものを打ち砕こうとする人間の牙が、ひどく滑稽なものに思えた」と。盗伐の話とか、親を殺された子熊の飼育などもあるが、最後はその成長したヒグマと愛犬が闘って共に死んでいく。その悲しみの中に、人為を超えた自然の命への思いが貫かれていた。

「エニシング・ゴーズ」私は今回、この作品を当選作の第一に推した。残念ながら、選考委員の価値基準の違いは如何ともしがたく、優秀賞という結果になった。この作者は実によく書き続けてきた。その中で、発想の特異な作品群は、私にはそれほど響いてはこなかった。前回のたしか「レンタルルーム」なども、発想としては面白いが、最後は架空のドタバタに終始した感があった。

しかし、今回は違うと感じられた。女性主人公と半ば一心同体化した語りは、見事という以上に、その時代の息吹を活写しつつ、生きて流れている。……著名な左翼的評論家を父に持ち（それは主人公には人生の重い足枷のようなものだったのだが）、それから逃れ、歩み出すために三人の男を伝ていったのだ。一人は大学生の内田君、そのどこか弱弱しさとセックスの相手ということも含めて、主人公の心理的な安全地帯のような。そして十歳程年上のあまり

の美しさは忘れ難い。……いまとなってみれば、あれほどの詩は私の人生に二つと存在しないからだ」と。

「災禍の向こう」江戸末期に高祖父が興した老舗の酒造、主人公は五代目になる。しかし、ある日近くの川が決壊し、著しい被害を受ける。その水害から二ヶ月後、「亀の歩み、鶴の恩返し」というキャッチフレーズをつけて売り直す、しかし芳しくなかった。

一方、主人公には、高校時代の野球仲間がいる。万年補欠だった主人公は最後の試合で、その友人が監督に進言してくれたことを思い出す（結局は受け入れられなかったが）。そしてコロナの災禍に見舞われ、その気丈に思われていた友人は自死してしまう。一方、それを乗り越えて主人公はまた、人生のバッターボックスに立つ決意を新たにす。小説としてとにかくストリートな主人公が光った。「ウィルスと木偶廻し」徳島県のある村に生まれ、九十歳になった老婆の回想と孫との関り。その村に、かつて主人公が幼い頃、木偶廻しの親子がやってくる、その父親の方はひどい難病だった。それでも家で彼らを迎えて上げ、その子の方（ヒデオ）が正式に家の子になった。主人公はそのヒデオに、溺れかけた命を救われもする。しかし彼も当時の『流感』に罹ってあつげなく死んでしまふ。そのヒデオへの追想と、東京で一人暮らしをしながら、プロのシンガーソングライターをめざしている孫との関わり

……その構図の中で、今のコロナと全く同じことだった。いわれなき差別やいじめが横行」していた当時の回想が読ませるものとなっている。

「無低の住人と少女」 脳梗塞を患い身寄りもなく、無低（無料低額宿泊所）にいる男。ある小柄な男から声を掛けられる。その胡麻塩頭の男の人生を聞いてやるうち、彼の娘夫婦は火災で焼け死に、一人娘が残っていたと、そしてその孫娘はある施設に入っていると聞かされる。そしてその三日後、小柄な老人は亡くなってしまふ。

仕方なく、その孫娘と接しているうち、男は何か変わって行く。一度も行くことのなかった病院へ行ったり、（バスタを捻出するため煙草をやめたら食欲が戻り三食とも食べ残すことがなくなった。加えて、暇を見つけて大学ノートに書き物をする。いつの間にか小説や詩ではなく童話を書くようになっていた」と。人生を諦めていた男が偶然の出会いから、生きる意欲を取り戻していく過程が、リアリティを持って描かれている。

「一時帰宅」 入院している施設から老いた母親が戻ってくる。帰宅と言っても、二十六年間一人で住んで来た家である。息子はそこへ行き、束の間の母息子の水入らずの生活が始まる。それが実に瑞々しく描かれている。この小説のクライマックスは、ご飯をよそうシーンである。  
（しゃもじ？ そう、しゃもじ、ああ、ここにあったかね。

判官などが交流し合う人間模様の小説。

「三月十九日」 歯科医の父と息子の話。しかし息子は癌が全身に回っている……。その息子を看取るまでの経緯が臨場感をもって伝わってくる。

「たましずめ」 主人公は、教員だった女性の先輩に救われた過去があった。その女性が高齢になり、退院後主人公の家庭に同居させてもらいたいと言ってくる。彼女にも弟を死なせていた過去があった……。心理的に深いものは感じられるが、主人公も先生も暗いものを引きずったままで、小説としては読ませる支点が見つからない気がした。

「遙かな海」 戦前の沖繩地方の若衆共同体的話。主人公も、そしてその相手になる佳子もなかなか魅力的に描かれている。〈あのね、自由や平等というの言葉じゃない。共同体も言葉の作品なのよ〉 そして時間論まで出てくる。ラスト〈そうよ。愛を創り出すのは感情ではなく、言葉なのよ〉と。知的な面白さはなかなかと思われつつ、ちよつと思弁が優先し過ぎ、理屈っぽい感も否めなかった。

「共生花」〈中学生の私は、母の自傷行為を目の当たりするのは、すでに慣れている〉 えっ、という感じで読んだ、ちよつと衝撃的な作品。しかし、最後までストーリーカーの中年男を母で惨殺してしまい、しかも平然と？ している女子中学生の感覚はリアリティを感じられなかった。

「ヒバカリ」 大学を中退している主人公の青年と、歯科

……そう言いながら右手を伸ばして握ると、母は安心したのか大声を出した。しゃもじやと、妙な名前やねー、すっかり忘れちゃった。まっこと変な名前や……。和幸もつられて可笑しくなってきた。……ついには二人して涙が滲むほど笑いの垣根に嵌ってしまい、気が付くと鍋が焦げ付きそうだった。生きている実感とは、心の底から共感できる相手がいること、人生の登りでも下りであっても、それが命の束の間の共有なのだ。それを見事に描いた秀作である。

「入学記念写真」 母子家庭で育った主人公。入りたくないブラック企業に勤め、白アリ駆除の仕事で家を回る。そんな中、ある老女と知り合いになり、人間としての気持ちの交流をする。最後はすでに亡くなっている老女を弔いに、預かった猫と共に行くのだ。情の在処を見せてくれた作品。

「夫婦力」 子どもができず、離婚を決意した中年の夫婦。しかし過去の居住地を訪れ、知り合いの高齢の人に……。世の中に何一つ変わらないものはないけれど、せめて夫婦の情愛だけは永遠であつて……。と論され、離婚を思いとどまった話。

「D&Sの功罪」 この賞の第一回から、様々な形で力作を送って来られた作者。小学校卒業時に校庭に埋めたタイムカプセルを掘り出そうという話。主人公は医者、そこに地元の新聞社の女性や、列車の中で主人公が命を救った裁医の若い叔母。主人公が知り合った女性奈津子の父親は、その叔母がパトロンで、しかもアトリエの火災で亡くなつてしまふ。最後は奈津子も菜園で凍死してしまふ……。ヒバカリというのは無毒な蛇だが噛まれると、その日ばかりというこららしい。叔母がヒバカリに喩えられているのか……。良く分からなかった。

「残照」 娘と二人暮らしをする父親の話。やり手の娘と、父親の再婚の話、まあほのほとした小説。

「ミルクレディ」 付き合った女性が「会食恐怖症」という病気を持つ女性だったという話。でも牛乳は飲めたのだ。最後は主人公の前で、ラーメンを全部食べてみせる。彼女の症状も克明に描かれてはいるが、何よりそれに寄り添い切った主人公が健気だ。

「光の射す方へ」 ハサミで人形を切り裂く趣味を持っている主人公を、「あなた」という人称で描いていく、特異な感覚の小説。異様な感覚がどうして生まれ、どうなっていくのか読み進めたが……。良く分からなかった。

「ある再会」 高齢者施設に住む元教師の女性の所へ、教子という女性が面会にやつてくる。五十年ぶりの再会だったが、それは懐旧的なものではなく、その教子か抱え続けてきたトラウマの吐露だった。でもそれは覚えのない出来事だった……。

「美女峠」 幼馴染の愛しい女子が貧しさゆえに売られて





選考会風景 2021.11.3 「サロン・ド・八覚」にて

行った話、主人公はその女性と、しかし再会できた。戦前の話だが、時代や情が良く描かれている。美女峠の清姫の話もそれにうまく呼応していた。

「権花の夢」 老人が不思議に若返って、好きな女性を助ける武勇伝も描かれるが、結局元に戻ってしまう話。老いてなお、性的なエネルギーを回復し高齢青年として生きたという願望は良く描けている。

「ラダーバック」 冴えない女をハントし、行為を撮影しそれを心の糧にしてきた男。へ私は与えられた簡単な仕事を、満足にこなせないと評価されてきた人間だった。それが、課題を決めトレーニングや発声練習を続けることができた。これが、誰も知らない本来の私の姿だった。そしてへあの時、身体を中心に冷たい滴が流れ、それまでの人生で見たことのない灯りを見たことを思い出した。私が抱きしめたのは女というより愛おしい自分自身だった」と。

異様な辺境の場での狩猟行為の中に人間の孤独な姿を映し出した秀作と思えた。

「silent love」 道を挟んでそれぞれの仕事に励む男女が、やがて黙視し合う中で魅かれ合い言葉を発し合う瞬間までを描いた、ちよつと発想の面白い小説。

「ゲリマンダーの写真帳」へ二つの町を含め学区に抱える中央小学校、卒業する児童が、三つの公立中学校に分かれて進学する。その進学先をめぐり、この二つの町は腸ねん

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博

おおたか まさひろ  
1954 石川県生まれ 日大国文学科卒  
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞  
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志

こはま きよし  
1950 沖縄県生まれ  
劇団四季など様々な職を遍歴  
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める  
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

八覚正大

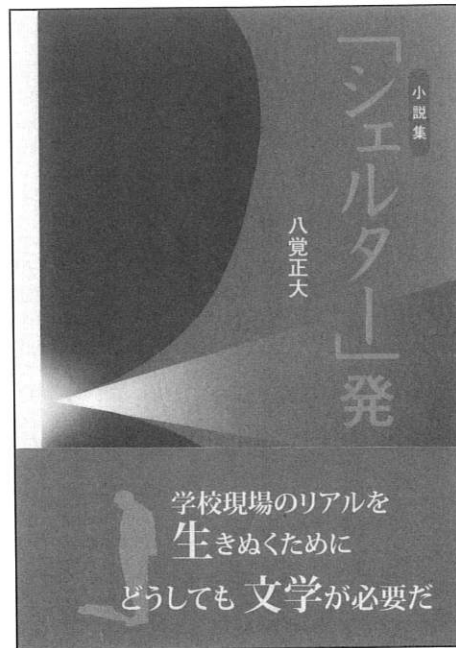
はっかく まさひろ  
1952 東京生まれ  
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒  
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

五十嵐勉

いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒  
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞  
84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長  
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンちゃん、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771



けやき出版 1500円(税込)

転状態」にあった。それがタイトルの、アメリカのある政治区分の喩えに繋がるようだ。それがかつて好きだったのに忘れてしまい、その計報に対応できなかった女子への主人公の気持ちに重なった……という小説らしい、しかし思いのルーツとタイトルが少し乖離した感がある気がした。

「ついのすみか」 九十五才の老女とその息子の視点を交互に入れ、養老施設に入るまでの経緯が克明に描いてある。「ドッグパドル」 子どもの出来なかつた夫婦が思い余って子犬を飼う。その揚げ句溺れかけた犬を救おうとした夫は溺死し、犬は自力で生き延びる……。発想には魅かれたが読後感は少し虚しい。

# 隻眼の熊

塩崎憲治

風の強い夜だった。

冬支度に疲れたのか、妻の幸は早くも寝息を立てている。勇も、うとうとしかかった時だった。

突然、木々のざわめきにカールの吠える声が重なった。尋常な吠え方ではない。勇は飛び起きた。

納戸から鉈を取り出す。幸も気づいたらしく、出刃を握りしめ後に続く。

「おまえはここに残れ。万一の時は、裏口から村長さんの家まで走るんだ」

あれ、おかしいな——静かになった……。それまで烈火のごとく吠えていたカールの鳴き声が、ピタッと止んでいた。外に出て、勇は目を見張った。犬小屋がつぶされ、カ

ルの姿は見えない。噛み切られた首輪が、その凶暴さを見せつけていた。勇は血で濡れた首輪を、そっと隠した。

翌日の夜、この辺り一帯の家畜を襲っていた、体重三百五十キロの大きなヒグマが射殺されたと、ラジオニュースが伝えた。

勇は、四十年ほど前、実家の近くの開拓村で起きたというヒグマの食害事件を思い出していた。当時、羽幌警察分署の巡査だった父は、急遽現場に駆けつけた。酸鼻を極める殺人現場を見慣れていたはずの父が、犠牲になった八人の遺体を見て、半年近くも飯が喉を通らなかつたという。

だがヒグマは、アイヌの時代から神の化身と崇められてきたことも確かだ。その熊が人間を狩り、地獄を見せる。

神と悪魔、両極の存在。それは人間の姿、そのものなのかもしれない。

カールは前任者から譲り受けた犬で、熊を恐れないアイヌ犬の血を引く北海道犬だった。

突然二人を襲った悲しみは、カールの存在が家族にどれほど温もりをもたらしていたかを物語っていた。だが感傷にふける間もなく、季節は厳寒の冬に突入した。

北海道オホーツク地方の冬は、吐く息も瞬時に凍る。さまざまじ地吹雪が舞い、見渡す限り白銀の世界と化す。人間も動物も、ただ寒さに耐えるという生活を強いられる。二人は、カールをしのびながら、ひたすら酷寒の生活に耐えていった。

翌年の四月、津別峠へと続く山々にも春の兆しが見えてきた。峠の向こうには、雄大な屈斜路湖が広がっている。その先には、知床連峰の南端に位置する摩周湖が、ひっそりと湖水を湛えている。

庭の雪も融け、北国の遅い春が、暖かい風を運んでくるようになった。

「ただいま。おーい幸、ちよつと見てみないか」

勇は玄関の引き戸を開けると、家の中に機嫌のいい声をかけた。その腕にはこげ茶色の可愛い子犬が抱かれている。

「あらっ、可愛いわねー、どうしたの、それっ？」

幸が目丸くして三和土に降りてきた。

子犬はやつと開くようになった目を細め、頭をなでる妻の手に鼻を擦りつけている。

「マタギの源蔵さんのところに寄ってみたら、藁の上に生まれたばかりの子犬が五匹も寄り添っていてね、カールの代わりに一匹あげるよって言うんだ」

「あら、かわいそうに。捨てられたのかしら」

「いや、源蔵さん、狩りのお供にシェパード飼ってたろう。いい繁殖業者が見つかって授かったそうだ。二匹は警察犬に、残りの一匹も買手がっているらしい」

「シェパード！ そんな立派な犬をいただいて、何か、お返ししなくちゃならないね」

幸が、カールを思い出したのか、横顔に寂しさを滲ませた。

子供がいない夫婦は、カールを子供のようによく愛がっていた。勇の山仕事にも力強い味方だった。この犬も、きつとカールに負けない、たくましい犬になるに違いない。

「ジャーマンシェパードの血を引くそうだ。育て方は難しいが、源蔵さんに色々コツを教えてもらった」

ジャーマンシェパードは世界的に知られた軍用犬で、運動能力、頭脳ともに、最高の使役犬と言われていた。

二人は、子犬に同じカールと名前をつけ、再び家族の一員として育て始めた。

北見勇が津別町営林署の担当区主任（現森林官）として採用されたのは今から三年前の昭和二十三年、勇が三十歳、幸が二十七歳の時だった。引継ぎのとき定年退職の先輩は、仕事の段取りと同じ真剣な目で、ヒグマの対処法を教えてくれた。

担当区主任の仕事は、好きでなければできないと言われる。気の荒い作業者を束ね、時には一緒に丸太を満載した木馬きうまを押す。監督の力量と、森林を愛し、そして闘う気概が必要とされた。

担当区事務所は津別町から十キロほど離れた村のはずれにあった。事務所といっても、山小屋のような自宅兼事務所。村人と食べ物を分け合い、友人もできるようになった。

北海道で、戦後の経済復興の最前線となったのが、国有林を中心とした林業だった。国有林は林野庁の監督下であり、末端組織である営林署がその管理・経営に当たっていた。当時、津別町の林業地帯には、広大な国有林が存在した。良質なカラマツ材が合板に加工され、全国に出荷されていた。カールが来てから、北見家に再び明るさが戻った。幸は、子供が授かったように、本当に嬉しそうにしている。一週間が経つと、土間を歩き回るようになった。土の匂いを嗅いだり、上がりかまどの框かまどの木に鼻を擦りつけている。

る。だが「来い」は、飼い主と犬との強い信頼関係がなければ成り立たない。

最後の仕上げに幸が挑戦した。「カール、来い」幸の優しい声が響く。

カールは相変わらず、尾を小刻みに振りながら、クマザサの中に鼻を擦りつけている。

この「臭い嗅ぎ」は、犬にとつては重要な習性だ。人間は情報なしでは生きていけない。犬もこの行動により、その場所を通り過ぎた動物の種類、大きさ、脅威など、過去と現在の情報を同時に知ることができる。

「カール！ 来いっ」幸が再び大きな声を上げた。

カールがビクッと反応した。体を瞬間的に翻し、一目散に幸の元へと駆け寄った。

「おすわり！」幸が続けた。カールは、地面の尾を左右に振りながら、従順な目で幸を見上げている。「よし、よし」幸は、自分が丹精込めたおやつをカールの口に入れた。カールは喜んで口を動かしている。

幸の目が潤んでいる。勇も熱いものが胸を突き上げてきた。カールは間違いない、二人の子供となった。

勇は毎朝、国有林の管理の仕事で山に出かけていく。

今朝も、ごつい自転車にまたがった。見違えるように大きく成長したカールが、尾を振りながら、地下足袋にゲート

土間の隅に、水を飲む皿と、食べ物を入れるボウルを用意した。

茹でたジャガイモを入れてやると、まだ短い尾を振りながら、顔ごと器にうずめ、わき目もふらず口を動かしている。幼い犬が、与えた餌を美味しそうに食べるのを見るのが、こんなに嬉しい気持ちにさせるとは夢にも思わなかった。

ジャーマンシエパードのしつけは確かに難しかった。

「しつけは褒めることと、少々のおやつを」という源蔵の言葉を思い出した。マタギの生活は苦しい。源蔵は熊以外にも、うさぎやキツネも狩るので、干し肉を小さく切りおやつに使うのだと言っていた。だが勇の家にしても、夫婦が食べるのもやつと、おやつなどあるはずがない。

幸い山暮らしでも、網走からやって来る行商人のお陰で、ホッケの干物だけはいつも軒先に下がっていた。

幸は、カールの好きなジャガイモ、ホッケ、それに大根の葉っぱを練り合わせ、小さな焼き団子を作った。カールの訓練に、これは驚くべき効果を発揮した。

雄のカールにとって、「来い」を覚えさせるのが一番難しかった。

だがこの指示が一番重要だ。万一熊に遭遇した場合、むやみに向かっていくことは絶対に避けなければならない。

「来い」の一言で、すぐに飼い主のところに戻る必要がある。ルを巻いた勇の足にまわりついてくる。

「よし、よし、来年からは一緒に仕事に行くからな」

勇は、カールの頭を撫でると、ペダルを勢よくこぎ出した。それを見送るモンペ姿の妻とカールの目は、同じ光を湛えていた。

山深く分け入る勇の仕事で、最も危険なことは熊との遭遇だった。これまで無事にこられたのは、初代カールのお陰だ。二代目カールも、もう少しでその後を継いでくれるだろう。

翌年の秋のことだった。

勇は久々に我が家に帰った。今年は大規模な植林作業があり、ドラム缶風呂に入りながら、作業者と一緒に造林小屋に泊まり込んだ。

たくましく成長したカールを連れ、再び国有林管理の業務に就いた。

その山には、丸太の馬搬に使う山道が頂上まで延びていた。今日の仕事は、盗伐パトロールを兼ねた路面の安全点検だ。

その年は冷夏のせいも、落ち葉から顔を出すドングリの実はわずかだった。今にも雪に変わりそうな冷雨が降り続いている。勇はゴムの雨合羽に身を包み、木の根が縦横に走る山道を登っていた。

カールは時おり、しなやかな筋肉で覆われた体をぶるぶるつと震わせ、まとわりつく水滴を弾き飛ばしている。

勇は、まだ頂上が見えない山を見上げた。糸雨が顔を濡らし、フードの隙間から首筋を伝った。

押し寄せる原生林に腕ほどもある山葡萄の蔓が絡まり、林床はクマザサに覆われている。

カールが立ち止まった。水平にした太い尾がゆっくりと揺れている。両耳をピンと立て、鼻をかすかに動かしている。何かの存在を察知したのだろうか……。

熊は大型になるほど用心深く、山の頂上を中心に行動する。だが今年は餌不足で、油断はできない。

降りしきる針のような雨が、木々を吹き抜ける風を遮っていた。木の実の熟した匂いだけが漂っている。

勇は静かに声をかけた。「カール、どうした？ 何かいるのか——」

カールはふと我に返ったように、長い舌を出した。尾から緊張がとれ、穏やかに揺れ始めた。

「大丈夫だ。頂上はもう少しだ。勇はカールの首を撫でた。カールは安心したように、尾をなびかせ、勢いよく山道を走って行った。頂上に近づいた時、先に安全を確認するのがカールの役目だった。

勇は、盗伐者が残す路肩の崩れを点検しながら、歩を進めた。山道は急な曲がりに差しかかった。向こうに頂上が

は雨の中でも、人間の二千倍と言われる嗅覚でそれを察知し始めた。自分が、それを中断させてしまった。

勇に反撃する意志がないと見たのか、熊は地を這うように詰めてくる。熊は骨格が大きかったが、痩せていた。真つすぐに勇を見つめ、威嚇するように唸り声を上げた。飢餓と攻撃の興奮からか、よだれをだらだらと垂らしている。冷たく光る黒い目。全身から、今にも襲いかかろうとする殺気が漂ってくる。

突然、地響きを上げ突進してきた。ここで背を向けると生還の道は閉ざされる。果たして熊は目と鼻の先で止まった。先輩が言った通りだった。ヒグマだけが持つ奇異な習性。威嚇突進。ほとんどは脅かしで終わるが、稀に餌食となり骨までしゃぶられる。どちらに転ぶかは神のみぞ知る。紙一重の判断。この瞬間が熊を撃退する最後のチャンスとなる。ふと、熊の目に憎悪の色がないことに気づく。従順な眼差し——おやつを前にしたカールの目だ。フードを叩く雨音が戦慄となり、足元へと降りて行く。勇は隠していた鈍をゆつくりと持ち上げた。隠された人間の牙。無濁な目が、振り下ろされようとする刃の光を追う。目の奥に、刃とは違う、柔らかな光が見える。勇は、雨に打たれる十勝石のような目に、どうしても刃を浴びせることができなかった。

その間、数秒、千載一遇のチャンスは去った。

見えてきた。

その時、目の前に起こった異変に、凍りついた。岩陰からのつそりと褐色の塊が現われた。遠目に見ても三百キロ超、かなり大きい。

熊は立ち止まり、値踏みするようにじつとこちらを見ている。ルソンのジャングルで、ゲリラ兵の銃口が光った時以来の恐怖。あの時は敵の銃身も震えていた。だが、目の前の熊にひるみはない。熊の脳裏にあるものは何か。獣たちの棲みかに踏み入ることへの警告か、それとも最初から屠るつもりか。天秤にかけられた命。

勇は目をそらさず、一步、また一步と、後退りした。その動きに合わせるように、熊は大きな足を前に進めてきた。背中が異様に盛り上がっている。雨に打たれる耳が、こちらに向かつて立っている。攻撃の準備に入ったのだ。この駆け引きは凶と出た。勇は立ち止まった。静かに腰の鈍を抜く。熊は一瞬、刃物の鈍い光に反応の色を見せた。だが、肩で歩くように、ゆつくりと近づいて来る。勇は覚悟を決め、ぬかるみに足場を固めた。熊は、二十メートルほどのところで動きを止めた。

周りを窺いながら、低く唸り始めた。カールの存在を気にしているのかもしれない。勇は鈍を隠した。最後の最後まで、手の内を明かしてはならない。

あのとき熊は、勇たちの近くにいたに違いない。カール熊が、大きな爪を振りかざし、鈍を振り払った。牙を剥き出し、勝ち誇ったような咆哮を上げる。合羽のフード越しに左右の衝撃が走る。獠猛な顔が迫る。ぬるく生臭い息、獣臭が鼻を衝く。赤い舌、黄色い牙が迫る。勇は必死に払いのける。力が尽き、岩のような巨体が押し掛かってきた時だった。

腹に響くようなカールの吠え声が聞こえてきた。熊の背後に、一直線に疾走してくるカールの姿が見える。カールは路面に残像を残し、宙を舞った。カールの牙が、熊の右手をしかと捉える。二頭の獣は、その場でもつれ合った。勇は鈍を拾い、転げ回るカールを助けようと身構えた。カールは振り回され、地面に叩きつけられても、喰らいついたまま離さない。熊はついに反撃をあきらめ、クマザサの中へと逃げていった。

勇は、路肩でうずくまるカールに駆け寄った。後ろ足の傷から血が滲んでいた。熊を察知することができなかったことを悔やむように、弱弱しく地面に伏せている。

「カール、私がわるかった。助けてくれて本当にありがとう！」

カールは、「ありがとう」という言葉を聞くと、初めて尾を嬉しそうに振りながら、体を擦りつけてきた。

勇はカールの首を抱きよせ、全身をさすってやった。カールの目に、やっと安堵の色が戻ってきた。

「カール、今日はもう帰ろう。家に帰って早く治療をしなくちゃな」

勇は、カールの応急処置をすると、山を降り始めた。麓に着き、恐る恐る、勇は振り返った。雨脚が強さを増し、何もなかったように、山の陰影を覆い隠していた。

「あんた、どうしたの！ 顔が傷だらけで赤く腫れている。それにカールも怪我をして——」

幸は、勇とカールの尋常ではない姿をみて目を見張った。

「今日はカールに命を助けてもらった。まずはカールの傷の手当だ。それから、温かい汁かけご飯を食べさせてやってくれないか」

カールの活躍を聞いた幸は、涙を流しながらカールを介抱した。

二人の様子に、カールは重大な任務を果たしたことを実感したのか、満足そうに二人の頬を舐めている。汁かけご飯が出ると、尾を痛々しく振りながら、ボウルに顔をうずめていた。

勇は思い出していた。なぜあのとき鈍を振り下ろさなかったのか。熊の目の奥に、踏み入ってはならない何かがあり、たしかに見えた。恐怖が畏怖へと変わった瞬間、自分も一頭の獣となった。崇高なものを打ち砕こうとする人間の牙が、ひどく滑稽なものに思えた。

怠らなかつた。

斜面を登り切ると、道はややなだらかになった。トラックのわだちが、緩いカーブで延びている。林道はそこで切れ、今日の仕事の集材装置が設置されている。

カールが立ち止まった。とど松林に耳を傾けている。

「ヒヒーン！」「シー、ドウドウツ」「シー、ドウドウツ」「ヒヒーン」

突然、馬のいななきと馬方の掛け声が樹林の中を突き抜けてきた。ハツとして斜面に目を凝らす。茶色に光る馬体に、黒々としたたてがみが美しい。首は驚くほど太く、脚の筋肉が盛り上がっている。その首に巻かれたハモと呼ばれる馬具は銀色に光り、相当年季が入っている。それに比べると手綱を引く馬方は、どこか心もとない。

勇の脳裏に錆びたトラックが蘇った。路肩の藪に身を隠し、馬が引きずり上げてくる太い木を見守った。それはとど松林に自生する貴重なエゾ松だった。

エゾ松はとど松と違い、枝が下に垂れ下がっているのですぐ見分けがつく。年輪幅が狭く、材の緻密な良材は、ピアノ響板など的高級材料に用いられる。

馬方の男はすっぽりと手ぬぐいで顔を隠し表情が見えない。勇が役所から手渡されている伐採計画表にも今日の作業は載っていない。これは盗伐だ——。

勇は、馬方が近づくとつれて、胸に嫌な高鳴りを覚えた。

季節は巡り、また秋がやってきた。

その日勇は、索道の安全点検のため、早朝に山へと向かった。集材装置は六時に動き出す。当時は林道敷設の途上で、切り出した丸太の集材は、架線に吊り下げ移動する索道が主流だった。山岳地帯を張り巡らす集材用架線は人身事故も多く、索道の安全管理は勇にとって最も重要な仕事の一つだった。

徐々にペダルをこぐ大腿部が悲鳴を上げ始めた。自転車を隠し、黒く湿る林道を歩き始めた。

木漏れ日が、薄暗い路面に光を落としている。カールの背中揺れる光と影が、その精悍な体を浮かび上がらせている。

ふと見ると、車寄せに、錆びついた青いトラックが停まっていた。少し気になったが、この山には民有林もあり、間伐作業で業者が入ることも珍しくはない。

左側の斜面に、広大なとど松樹林が見えてきた。所どころ、間伐対象木として勇が巻いたブルーのテープが光っている。とど松を大きく成長させるには適宜に間伐しなければならぬ。陽が差し、風が通ることにより、樹木は光合成により大きくなる。

山葡萄の甘い匂いが、ひんやりとした樹木の匂いに重なり、勇を歓迎していた。だが勇は、大自然の脅威と、その自然を食い物にする人間の悪意に、研ぎ澄まされた五感を

どことなく見たことがある背格好だ。

一体となった馬と馬方は、渾身の力を振り絞り、エゾ松を林道に引き上げた。荒い息遣いの馬方が、手ぬぐいで汗を拭き始めた。

あまりの驚きに息を呑んだ。現れた顔は友人の源蔵だった。

「源蔵さん、あんた、まさか——」

「北見の旦那、ど、どうしてこんな早くに——」

源蔵も、口を半開きにしたまま固まった。

カールは二人の心の葛藤が分かるのか、下げた尾を小さく振りながら、辺りをせわしなく動いている。

熊を追う時とは違う源蔵の歪んだ顔を見るのは辛かった。

「青いトラック、あれ源蔵さんのだね——」

源蔵は無言のままうなずいた。唇を一字に結ぶと、手の平を合わせ、勇に頭を下げた。全身で見逃してくれと叫んでいる。

よりによって、なぜ友人でもあり恩人でもある源蔵が盗伐に手を染めたのか。勇は自分が犯した罪のように、悔しさが胸を突き上げてきた。風も雲も、鳥のさえずりさえも止まり、悲しい静けさが時を支配した。

「源蔵さん、こうしよう。これは二人の一生の秘密だよ」

担当区主任は司法警察職員として、盗伐の現場を押さええた場合は、その場で検挙しなければならない立場だ。だがそれだけは避けたかった。しかし、いくら親友でも、勇の

魂の拠りどころともいえる国有林の盗伐を見逃すわけにも  
いかない。

勇が出した結論は、林道を塞いだ風倒木の処理を、急  
きよ、通りがかった源蔵に依頼し、丸太を正規のルートで  
製材工場に納入するという筋書きだった。そして、せめて  
もの労力の代償として、馬とトラックのチャーター料だけ  
は規定の窓口で支払おうというものだった。源蔵は、目に  
涙をうかべ、うなずいた。

勇はリュックから、刻印ハンマーと墨壺を取り出した。  
「北見さん、このご恩は一生忘れません」

源蔵は目頭を押さえながら、頭を下げた。カールが初め  
で、源蔵の脚に寄り添った。源蔵が愛おしそうに、カール  
のあごを撫でている。カールは、生みの親を忘れてはいな  
かった。勇は、これで良かったのだと、自分に言い聞かせた。

源蔵は、何度も振り返りながら、役所の刻印が入った丸  
太を馬に引かせ、山を降りて行った。

翌年の夏の、ある日曜日。

勇には、たった一つ楽しみがあった。

「あんた、気いつけてね。今年の夏は特に暑いから、マム  
シが川に降りてきてるべさ。首も危ない、手ぬぐいをしつ  
かり巻いて」

「大丈夫だ。抜かりはない」

カールは自転車と一定の距離を取りながら、小走りで勇  
の前を進む。まるで行き先が分かっているように。

津別峠の山岳地帯を水源とする津別川に沿って農道を走  
る。一時間もすると、源蔵へと向かう林道にさしかかる。  
人気がない炭焼小屋を通り過ぎ、額に汗が滲んだころ、左  
手に川の音が聞こえてきた。

カールが耳を立て、谷を見下ろしている。早くも漁場に  
着いたことを察知したようだ。

勇は自転車を路肩に隠し、藪をかき分けながら斜面を降  
りて行った。この辺りは熊も多く、地元の舞茸採りのプロ  
が時おり入るぐらいで、釣り人は見たことがない。

カールは深い草木の根を嗅ぎ分けながら、すでに前を進  
んでいる。顔面に押し寄せる藪と闘いながら歩を進めてい  
る時だった。

ハツとして立ち止まる。だらりとした太い枝が行く手を  
阻んだ。よく見ると、無数の鱗がゆっくりと移動している。  
頭部が見えないほどに大きい。やがて尻尾をくねらせ、視  
界から消えていった。勇はこの時初めて、藪の上を這う蛇  
を見た。人間に尻尾を見せる蛇はマムシではない。もしこ  
れがマムシだったら――。勇はゾツとして首の手ぬぐい  
手をやった。

イタドリを藪を抜けると、川の流れが見えてきた。幅は  
約五メートル、岩盤の多い溪流だ。川面がキラキラと光つ

勇は、タバコのヤニを、念入りにゲートルに染み込ませ  
ていた。

マムシの生息域は全国に渡るが、北海道のマムシは特に  
大きく、動きも早い。マムシの毒は血管を破壊する。血清  
投与を含めた高度医療が整わない時代、万一噛まれれば命  
に係わる重大事だった。

勇は、釣り道具一式をリュックに詰め、そつと玄関の引  
き戸を開けた。すぐに、カールが犬小屋から飛び出してき  
た。懸命に尾を振り、勇の足元にまわりついてくる。背  
負っているリュックに鼻を擦りつけようと、勇の体に前脚  
をかけてくる。中には、妻が作ってくれたみそ焼きおにぎ  
りが入っている。だが勇は、カールの興味は食べ物ではな  
いことを知っている。中には、掛けた魚の血が染みついた  
様々な釣り道具が入っている。類まれな嗅覚がそれを嗅ぎ  
分け、人間が抱く狩猟への憧れと同じように、カールの狩  
猟本能をくすぐるのかもしれない。

幸が、カールの様子に何かを感じたのか、口を開いた。  
「あんた、今日は何か胸騒ぎがする。カールを連れていつ  
たら」

「そうだな……。今日は一緒に行ってみようか」

カールは夫婦の会話の流れをよく理解できた。はち切れ  
そうに尾を振り、もう行先の方向に耳を立てている。

勇は、カールをわきに、自転車をこぎ出した。

ている。平瀬は川底の石がよく見えるほどに澄んでいる。  
所々顔を出す大きな岩の巻き返しは深い渦が巻いている。  
向こう岸のトロ瀬で魚がジャンプする飛沫が上がった。  
カールがさかさ耳を立てた。跳ね方でヤマベと分かる。  
北海道ではヤマメをヤマベと呼び、漢字では山女魚と書  
く。魚体にパールマークがくつきりと浮かび、実に美しい。  
前人未到の溪流は魚影が濃かった。

勇は餌釣りの準備に入った。餌は現地調達する。その  
流域で捕れる川虫を最良とするが、トンボ、蜘蛛、蟻など  
何でも食べる。今日は、たくさん捕れたイタドリ虫を使う。

魚は水中で、上流から流れてくる餌を待っている。餌に、  
少しでも不自然な動きがあると食いつかない。木の葉から  
落ちたばかりの虫は浮力があるので、川面に浮かした方が  
よく釣れる。

ヤマベが跳ねた辺りの上流に、針を飲んだイタドリ虫を  
流し込む。毛糸の目印がポイントへと向かった。水しぶき  
を上げ魚体が躍り出た。食いの感触に合わせる。竿が大き  
くしなり、重い手応えが伝わる。負けずに竿を立てる。見  
事なヤマベが空中にきらめいた。

あつという間に、十数匹のヤマベが竹籠の中で暴れてい  
た。カールは利口だ。決して吠えたりはしない。大きく口  
を開け、長い舌の動きで、一緒に釣果を喜んでいる。勇は  
一番大きなヤマベをカールに与えた。嬉しそうに尾を振

り、あつというまに平らげた。勇は、さらに遡上した。岩場が多くなり、流れが速くなった。左側は見上げるような切り立った崖になっている。この先は、二尺を超えるアメマスの生息域だ。急にカールが身構え、両耳を立てた。

山間から、「ホリヤー、ホリヤー」という、熊を追う勢子の声が響いてくる。勇は、辺りに目を走らせた。間もなく一発の銃声が轟いた。カールがビクンと反応する。春グマ駆除と呼ばれる狩猟期間はとつくに過ぎていく。程なく、足元の流れに薄っすらと血と脂が浮かんできた。嫌な予感が走った。手負いの熊は川沿いを逃げる。

「カール、ここは危ない！ 離れよう」

勇は川から上り、釣り道具を仕舞った。カールはすでに斜面を登り始めている。

川からも見えていた大きな岩にたどり着いた。ここなら流れ弾も防げそうだ。身を隠し、息をひそめた。

どうやら熊は銃弾に沈められたようだ。渓谷は再び静寂に包まれた。その時だった。カールが立ち上がり、両耳を立てた。何かを察知している。勇も耳を澄ました。確かに、谷の方から近づく何かの気配を感じる。岩陰に身を潜め、様子を窺った。カールは、勇を守るように構えている。

果たして何かが、よろよろと斜面を登って来るのが垣間見えた。徐々に、動物の息遣いが近づいてくる。カールが

ら、子熊を必死に抱きしめた。やがて、震えていた子熊は、勇の腕の中で静かになった。その時、勇の衣服がところどころ血に染まっていることに気づいた。子熊の体に傷はなかった。死に行く親熊の、最後の温もりに甘えたあとなのだろうか。

カールが近づいてきた。尾を優しく振り、子熊の顔に鼻を近づけた。子熊は最初、驚いたようにカールの大きな顔を見ていた。恐る恐るカールの鼻に小さな鼻を擦りつける。

勇は子熊をそっと地面に置いた。子熊はクウー、クウーと甘えながら、小さな爪を立て、カールの脚によじ登ろうとする。カールは優しい目で、子熊の顔を舐めている。

その姿は、まるで親子のようだ。食うか食われるかの獣の世界。親を失った子熊の、生き残るための本能なのかもしれない。

カールにも、偶然巡り会った子熊に、同じ動物としての友情が芽生えたようだ。

勇は、子熊をこのまま家に連れて帰りたい衝動に駆られた。だが、熊を家で飼うことは法律が許さない。

勇は、子熊をそっと、洞穴の入り口においた。子熊は毛で覆われた小さなお尻を向け、洞穴にもぐり込んでいった。間もなく、顔だけを出し、勇たちをじっと見つめている。

親がいなくなった寂しさが、幼い目に漂っている。カールも、静かに尾を振りながら、心配そうに子熊を見つめている。

腰を落とし、低く吠え始めた。戦闘の態勢だ。「さてー」勇は静かに制した。笹藪から顔を出したのは、まだ一歳にも満たないような子熊だった。こげ茶色の子熊は、辺りをきよるきよるとしながらも、この岩に向かっていくようだ。

親が射殺され、子熊だけが逃げてきたのかもしれない。子熊が逃げ込む場所——。ふと見ると、岩の下に、洞穴が口を開けている。もしかしたらこの洞穴は、親子熊の巣穴なのかもしれない。勇はカールを促し、岩から離れた。カールも子犬と変わらない子熊に安心したのか、目が優しく戻っている。

子熊は、すぐには巣穴に入らなかった。岩をよじ登り始めた。てっぺんから見渡せば、こちらの存在に気づき、岩の向こうに逃げていくことは間違いない。親から授かった知恵なのかもしれない。

勇は駆け寄り、子熊の短い後ろ足をつかんだ。子熊はビクンと反応し、怯えた目で振り返った。ここで吠えられると厄介なことになりそうだ。勇は岩に爪を立てる子熊を素早く引きずり下ろした。優しく抱きかかえた。子熊はドングリのような黒い目を光らせ、幼い牙で勇の腕を噛む。分厚い作業服の上からでも野生の力が伝わってくる。おそろく、たつた今日の当たりにした人間に対する、本能的な抵抗に違いない。勇は、小さな背中をさすり、頬ずりしながら

勇は、釣ってきたヤマベの一匹を、子熊の前に差し出した。子熊は最初、怪訝そうな表情を勇に向けたが、勇が微笑みかけると、安心したようにヤマベを食べ始めた。よほど腹が減っていたのだろう。時おり勇を見上げながら、頭から尻尾まであつという間に平らげた。

勇は二匹目を取り出した。今度は、味を噛みしめるようにゆつくりと咀嚼している。食べ終わると子熊は、再び洞穴に入ってしまった。暗闇から、二つの小さな光がこちらを見ている。勇は家族の分、三匹を残し、あとはフキの葉に包み洞穴に置いた。二つの光は、まだこちらを見ていた。「また来るからね」と声をかけ、勇たちは洞穴を後にした。

家に帰り、勇は事の始終を妻に話した。

「熊は怖いけど、親を失った子熊は可哀そうだね。生きていられるのかどうか……」

「釣りのついでに様子を見てくるつもりだ。それにしても酷いマタギがいたものだ。毛皮を狙う密猟者だろうか……」

マタギの世界には、二歳以下の子連れの母熊を仕留めてはいけないという掟がある。子熊が生まれると、父熊は巣を出て行く。銃弾に倒れた熊は、母熊に違いなかった。

珍しく源蔵が訪れたのは、その二日後だった。彼は手土産に、熊の肉を持ってきた。勇は、ふと嫌な予感がしたが、

まさかと思ひ直し、熊汁で一緒に酒を飲むことにした。酔いが回ったところだった。源蔵が「実は」と、勇をのぞき見た。

「熊を仕留めたが、あいにく子連れの雌だった。岩の陰で子熊が見えなかった。子熊を育てようと思ったが、逃げてしまった」

「子熊って——何歳くらいだ？」

「まだ生まれて間もない感じだった。熊というよりも子犬のようだった。生きていられるかどうか……」

勇は絶句した。胃の中から、熊の肉がジワリとせり上がってくる。偶然だと言ひ聞かせ、茶碗酒の残りを、ゴクリと飲み下した。

源蔵は、勇の動揺に気がつかない。やっと言葉を繋いだ。

「ば、場所はどのあたりだ？」

「ああ、行ったことがあるかどうか、炭焼小屋のわきから入った沢の奥だ。キノコ採りの老婆が食い殺されたという情報が入った。いつもの相棒が怪我をして、勢子として、鉦路から流れて来た若いマタギを連れて行った」

勇は、あの子熊の母熊に違いないと確信した。

源蔵に酒を注ぐ幸の表情も暗い。夫婦の心境など分かるはずもなく、源蔵は酔いに任せ、再び口を開いた。

「まだある——。その流れ者が、とんでもないことをしてしまった」

掟破りがばれば、明日から飯が食えなくなる。源蔵はうなずくしかなかった。

若いマタギが、マキリを抜いた。源蔵は空を見上げ、子犬が首を絞められるような鳴き声を聞いていた。

かざりと小さな音がした、源蔵は振り返った。岩の陰から、小さな目でじっと見つめるもう一匹の子熊がいた。一部始終を見ていたに違いない。石にかけた小さな爪が、カチカチと音を立てている。

源蔵が近寄ると、子熊は岩の間を転がるようにして、笹藪の中に消えて行った。

語り終えた源蔵の目が、複雑に揺れていた。

勇も、幸も、最後までその子熊を助けたことは言い出せなかった。

それから勇は、子熊に「ゴン」と名付け、釣りに来るたびに、ヤマベを洞穴に持って行った。子熊は真つ暗な穴の中で、怯えたように小さな二つの光を放っていた。

月日は流れ、その光は力強く成長し、その感覚も広がっていった。

勇とカールが洞穴に着いた時はすでに、カールを超える嗅覚で、きりりとした立ち姿を見せるようになった。転がるように駆け寄ってきて、勇の脚から胸へとよじ登り、顔に鼻先を擦りつける。もう抱きかかえることができないほ

それは、一挙に酔いが引いていくような残酷な話だった。源蔵の銃弾を受けた熊は力尽き、川辺の岩陰で体を折るようになって動かなくなった。瀕死の様相だが、未だ息はしている。銃弾が内臓を貫いたのか、滴る涎が赤く染まっている。

その時、熊の腹の下で何か動く気配がした。よく見ると子熊だった。肩で息をする親熊が、子熊を守るように隠している。源蔵はその時初めて、母子熊だったと気づいた。

子熊は、銃弾が入った部位と見られる胸のあたりを、か細い声を上げながら舐めている。

「手負いだ。気をつけろ！」

若いマタギが、心臓を狙い、タテ（熊槍）を突き刺した。親熊は、わずかに牙を見せたが、やがて息絶えた。子熊が哀しそうな声を上げた。早く目を覚ましてと言うように、動かなくなった母熊の腹を引っかいている。

「どうするこの子熊——」若いマタギが、タテの血を拭いながら眉をひそめた。「役所に持っていっても、裏で熊汁にされるのがおちだ。それに俺たちもただではすまねえ」

源蔵は途方に暮れた。若いマタギが、たみ込むように続けた。

「下手に逃がしてやると、恨みを持ったまま大きくなって、また人間を襲うに違いねえ。可哀そうだが、しめるしかねえだろう」

どに、大きくなった。

それからカールとゴンの、友情のひと時が始まる。お互い、懐かしそうに目を細め、顔を寄せ合う。二頭は互いに甘噛みしながらじゃれ合い、無防備な腹を見せる。

ある秋の日だった。しばらくぶりに、大きなヤマベを二匹携え、勇とカールは洞穴に向かった。

不思議だった。ゴンの姿がない。声をかけても、暗がりの中は静まり返っている。勇はあきらめ、フキの葉に包んだヤマベを入り口に置き、去ろうとした時だった。

「クーン」というかすかな鳴き声と共に、暗闇の奥から小さな光が見えてきた。

「なーんだ、いたのか。ご馳走だ、さあ、カールと一緒に食べよう」

勇は、近づいてくる光を見つめた。あれ、どうしたのだろう——。光が一つしかしかない。

浮かび上がったゴンの目を見て驚いた。左目が深くえぐられている。なぜこんな惨いことに——。あの時の、柔らかな銃口のような目が切なく蘇る。体も痩せ、艶もない。

カールは、尾を静かに振りながら、ゴンの光が失せた目を優しく舐めている。

ふと、まだら模様のような大きな羽根が目に入った。人間に親を奪われ、空の敵との闘い方を教えられていないゴンは、



危なく猛禽の餌食になるところだったのかもしれない。それから勇は、自分の食事も惜しみ、食べ物をゴンに与えた。カールとの強い絆もゴンを力づけ、見る見る回復していった。

熊の成長は早い。季節が変わる度に大きくなり、カールと同じほどの体格となった。それでも二頭は、あの頃と同じように、鼻を擦りつけ、じゃれ合っている。時にはドキッとすることもある。ゴンは口を大きく開け、カールの顔に牙を立てる。だが甘噛みの牙は、深い愛情の証だ。最後は、幸の作った団子を仲良く分け合って食べていた。

セミの鳴き声が、秋の気配を伝えていた。

源蔵が、風呂敷包みを持ってやってきた。いつかの感謝の印だと、知床の出稼ぎで仕留めたという熊の毛皮を取り出した。

幸が、「こんな高価なものを——」と言いながら床に広げた。

長い爪が力なく開かれ、玉眼の目が空を睨んでいる。ふと、ゴンの姿が脳裏をよぎった。それまで歓迎の素振りを見せていたカールが、尾を落とし、誰にもなく吠え始めた。無残にはぎ取られた毛皮を見る目が、悲しそうに沈んでいる。

「あなた、せっかくだけど、この毛皮お断りしたほうが—

あれから五年、ゴンは立派な雄の成獣となっていた。

マタギが隻眼の熊に襲われ、命を落としたと言うニュー・スガ流れた。猟友会に問い合わせると、あの時、源蔵と一緒に熊を仕留めたという若いマタギだった。偶然なのだろうが、勇はふと、あの残酷な話を思い出した。

山が燃えるような深紅に染まり、秋の深まりを見せていた。

旧交を温めようと、勇は幸が作った団子を携え、源蔵と山に出かけた。

二人はそれぞれに、川の幸、山の幸を求め、太陽の光りを遮るような樹林の奥深くへと入っていった。

昼飯時になり、勇は落ち合う場所に向かった。ふいに山陰から銃声が聞こえてきた。そう遠くはない。勇は立ち止まった。ほどなくして再び銃声が轟いた。勇は胸騒ぎがした。源蔵はこれまで初弾を外したことがないからだ。

勇は、獲物と釣り道具を放り出し、走った。果たして林道を曲がると、ひしゃげた村田銃の向こうから、足のすくむような光景が飛び込んできた。巨大な褐色の魔物が、源蔵の上に押し掛かり、頭部を不気味に動かしている。ヒグマの腹の辺りから出ている地下足袋が、力なく地面を蹴っている。

勇はとっさに腰のマキリを引き抜くと、熊の背に躍りか

—

幸が気の毒そうな目を向けた。勇も、そのほうがいいと思った。

帰って行く源蔵の背中に、心なしか寂しさが滲んでいた。カールは、守ろうとする人間の、隠された牙に気づいたのだろうか。

翌日、カールがなぜか、炭焼き小屋の方に向かって吠えている。勇も胸騒ぎを覚え、ホッケの干物を携え山に向かった。

果たして、洞穴にゴンの姿はなかった。

その後何回か洞穴を見に行ったが、入り口は雑草で塞がれていた。

氷雪に覆われた原野も、春にはフクジュソウの花が顔を出す。季節は繰り返し、洞穴は木の根と蔓で覆われていった。

勇は、ゴンと巡り会った渓谷を忘れることができなかった。今日も釣り竿を振りながら、沢の奥へと遡上していた。

突然、対岸の岩の上で、熊の咆哮が轟いた。背筋に緊張が走った。だがカールは目を輝かせ、喜んで尾を振っている。

カールの三倍ほどに成長した姿はゴンだった。ゴンは未練を残すような鳴き声を残し、樹林の中に消えて行った。

かった。無我夢中で刃を突き立てる。何か所かは、硬い毛皮を貫通し肉に喰い込んだ。刃に吸い付く背肉の力は強く、やつと引き抜く刀身に脂がぬめりつく。渾身の力で、最後の一太刀を振りかぶった時だった。突然熊が巨体をひるがえした。牙を剥き、鋭い爪を振りかざす。その目を見て勇は息を呑んだ。熊の動きが止まった。一瞬の逡巡。熊は悲痛な咆哮を上げ、手負いのままクマザサの中に飛び込んでいった。ゴンに違いなかった。

空を睨む源蔵の目は灰色に霞み、かすかに口を動かしている。

「引き金を引く瞬間、片目に気づいた。初めて弾道を外した。とっさに頂いた団子を放った。熊は立ち止まり、匂いを嗅ぎ始めた。二発目を装填したが、遅かった。だが、不思議だ。熊は銃口を向けた人間を絶対に許さない。真つ先に顔を破壊する。でも、こうして、俺は生きている……」血に染まった右肩からは白いものが覗いている。勇はすぐに止血を施し、源蔵を背負った。

源蔵が助かったのはゴンの意思なのか、確かめようはない。源蔵がマタギに戻れるには、時間がかかりそうだ。

人を襲う隻眼の熊が出没するという話が広がった。聞くに堪えない、辛く悲しい噂だった。

真つ白な髭で覆われたマタギの長老が、隻眼の熊を仕留めるためにやって来た。知床で三十年の間、一のブツ<sup>解</sup>ッ<sup>手</sup>ッ

を務めてきた手練だという。

長老は、土地勘のある勇に、協力を求めてきた。

勇は迷った。だが、これ以上犠牲者を出すわけにはいかない。ゴンを駆除することを決心した。身を刻む思いで、作戦を練った。

幸が涙を流しながら作った団子を、獣道から大きな岩陰へと撒いた。岩の裏には、へばりつくようにブッパが控えている。そこはゴンの全身が晒される惨い場所だった。わきには、ゴンと巡り会った場所の上流となる深い溪谷が迫っていた。

二日が経った。やはり来た——小山のような体。ゴンは必ず来ると思っていた。だが、様子が変だ。団子の匂いを嗅ぐだけで、食べてはいない。ゴンは、注意深く辺りを見回した。岩ではなく、太い木の陰に隠れた自分とカールの方向に歩き出した。もしかしたら、団子についての匂いが分かったのだろうか。

「クウーン」三十メートルほどのところでゴンが、甘えるような鳴き声を上げた。やはりそうだ。ゴンは自分とカールに会いに来たのだ。勇は急に、胸を突き上げるものを覚えた。

ゴンがゆつくりと近づいてくる。ゴンからは死角となつてブッパの姿は見えない。もうわずかで射程距離に入る。

少し早ければ——

「いいえ、私がチェーンを離れたばかりに」

勇は、なぜか「来い」をためらったことを思い出していた。

「ただ、私は救われました。これまで数えきれないほどの山の王を葬り、心は限界でした。里に下りれば魔物と憎まれる熊も、山では神の存在。仙境を荒らしたのは、いったいどちらなのか……」

しばし山を眺めていた長老が、思い出したように続けた。

「ただ一つ、犬がなぜ、最後にあの遠吠えを発したのか？」

「と、いいますと——」

「少年のころ知床で、今は絶滅したエゾオオカミの遠吠えを聞いたことがあります。まるで同じだった。狼の遠吠えは、仲間に分かる、安らぎの天地への呼びかけだと、アイヌの古い言い伝えにあるそうです」

長老が、優しい眼差しを崖の方に向けた。

勇は、頭の中が真っ白になった。今となつては、真実は谷底の霧の中だ。ただ、二頭が崖から消えた瞬間、ゴンが人間の牙から救われたことだけは確かだった。

勇は、「なぜカールまで——と、号泣する妻をなだめた。

「カールは今年で十歳。人間でいえば九十歳だ。自ら選んだ壮絶な最期だった」

カールはゴンの牙に散ったとまでは、とても言えなかつ

その姿には警戒心や疑いが微塵もない。自分を信じ切つて、一歩一歩近づいてくる。銃床を抱え込むブッパの肩が盛り上がった。単発式の村田銃は失敗が許されない。ブッパも命がけだ。ぎりぎりまで引きつけて、心臓を一発で打ち抜かなければならない。引き金の指が絞られる。カールの耳が動いた。勇が目を閉じた時だった。手からチェーンが離れた。カールが弾丸のように飛び出していった。ブッパの銃口が乱れた。

いったい何が起きたのか——。カールがゴンに猛然と飛び掛かる姿を、勇は茫然と眺めていた。あれほどしつめた「来いっ！」の一言が、なぜか出てこない。

カールはとこるかまわず咬みつくつと、崖の方向に逃げた。熊は逃げるものを追う。ついに二頭の獣は崖っぷちに迫った。

谷を背にしたカールが天に牙を剝いた。勇はハツとした。天空を射抜くような鋭い咆哮。その雄叫びに反応するかのように、ゴンは猛然とダッシュした。カールが立ち上がる。ゴンがカールの喉を捉えた。そのまま重なるように谷底へと消えて行った。

二人は恐る恐る、崖の下を覗いた。切り立った岩が口を開け、霧が底を隠している。

長老が口を開いた。

「飼犬には気の毒なことをしてしまった。引き金があつた。

それから一週間ほど経った日のことだった。

夕方から雨が降り始めた。夜半には、風の唸りが耳元をかすめた。

むなししい願い、木々のざわめきさえもカールの息遣いに聞こえる。

「あんな、何かの音がしなかった？」

「風のせいだろう——」

だが耳をそばだてると、微かにチェーンを引きずる音と、「クウー」という犬の鳴き声のようなものが聞こえてくる。

「ちよつと見てくる！」勇は、布団から飛び起きた。

「幸！カールだ、カールが帰って来たんだ！」

カールは、クウーン、クウーンと鳴きながら、あばらが浮いた体を勇と幸に擦りつけてきた。二人はすぐに手ぬぐいでカールの濡れた身体を拭いた。不思議だった。カールの喉に、ゴンの牙の痕がない。幸が玄関の土間に毛布を敷き、カールを休ませた。

「あんな、不思議だね。カールはどこにも傷がないのに、手ぬぐいに血が付いている——」

「え、そうか、それで助かったのか……」

勇は、カールをくわえたまま宙を舞ったゴンが、カールをしつかりと抱きしめ、切り立った崖を傷だらけになつて



塩崎憲治

しおざき けんじ

1948 北海道生まれ  
山形大学工業短期大学部卒業  
2008 外資系企業定年退職  
エコアクション21環境審査員  
同人誌「梟」で小説に取組む  
「山形小説家・ライター講座」受講  
山形新聞文学賞佳作／準入選  
第13回銀華文学賞優秀賞  
現在、環境カウンセラー  
山形県米沢市在住

技術畑一色で駆け抜けた会社人生。定年退職後はまったく違う世界を知りたく、小説に取りかかりました。デジタル世界からの無謀ともいえる挑戦。最初は描こうとするわずか一行が書けなく、限りなく高い壁が立ち塞がりました。同人誌や小説講座でアドバイスを受けながら、五年、六年と書き続けると、やっと小説世界が見えるようになりました。銀華文学賞と出会い、自分の立ち位置を把握できたことがその後の発展につながったことは間違いありません。今回は、人間、犬、熊という異なる生態を越えて生まれた友情をテーマとしました。現場の状況は、若き日、森林官として勤務した生前の父からの取材です。動機は現在問題になっている悲惨な熊被害の本質に迫りたかったことと、人間と獣という宿命的な生存領域の闘争に、文学として昇華できる要素はないか試行錯誤を重ねました。この度は、選考委員の皆様、本当にありがとうございます。心から感謝申し上げます。

銀華文学賞

受賞の言葉

塩崎憲治

落ちていく光景を想像した。いや、そうに、違くない。カールは、大好きなホットケの干物を一口だけ食べ、ジャガイモの味噌汁を半分ほど飲んだ。穏やかな目で二人を見つめると、安心したように眠った。

「カール、おはよう！」

翌朝勇は、カールの毛布をそつとはがした。一瞬、全身が銀色に輝いたように見えた。安らかな顔が、二度と目を開けることはなかった。

「カール！ どうしたんだ？ 朝だよ、一緒にごはんを食べよう」

勇は、まだわずかに温もりが残るカールの背中をさすり続けた。

「たった一晚だけ家族に戻りたくて、帰って来たんだね……」

幸も、あふれる涙を拭おうともせず、冷たくなりつつあるカールの身体に、いつまでも頬を擦りつけていた。

庭の隅に穴を掘り、カールを丁寧に埋葬した。終わったときは陽が陰り、津別峠へと続く山々の稜線が茜色に染まった。

カールとゴンが戯れる姿が、たしかに見えた。



悠久の時を経て今なお身近に広がる  
田んぼの風景、川の風景、里山の風景に  
その地で暮らした人々の哀情の思いと鎮魂の心を重ねたら  
不思議と「やすらぎ」の姿が現れてくる

利根川下流域の風景  
22選

文芸社◎定価(本体1,100円+税)

嶋津治夫画集  
「やすらぎの田園スケッチ」  
文芸社 本体価格 1,100円

## 闘牛の絆

勢  
隆

1

近海での網漁を終えた佐武勇三は、小型船の龍神丸を弟の正明が乗る明神丸と並走して、夜明けの漁港へ舳先を入れた。勇三と息子の朋也はト口箱の魚を漁協のセリ場に入れ、帰り支度をした。

「ご苦労さん。ひと眠りしろよ」

勇三は朋也に声をかけて坂道に向かうと、

「親父、お袋に持っていくのを忘れているぞ」

小ぶりのハタを捌いて置き忘れた包みを持って来てくれた。

勇三が住む南西諸島の奄美群島にある徳之島は周囲

気が刷り込まれ、高校を卒業すると進学や都会に憧れて若者は島を離れるが、そんな事には目もくれず、

「島一番の喧嘩牛を持ち、日本一の勢子になる」

と言つて漁師を継いで闘牛にかかわり、今では紗希のクラスメートの百合子と一緒に漁村に住んでいる。

朋也と百合子の馴れ染めは、紗希が中学一年の時に百合子が頻繁に訪ねて来るので朋也とも親しくなった。明るくて利発な百合子は銀行員の父親が奄美市の名瀬へ栄転したのに伴い、高校一年生の二学期に転校してしまった。朋也は動揺していたが、夏冬の休みには紗希と連れ立って訪ねていた。百合子は幼いころから看護師を目指して卒業すると、鹿児島市内の看護学校で勉学に励み、資格を得て学校系列の病院で看護師として勤務していた。朋也はその頃から百合子と結婚を決めていたようで、百合子が里帰りすれば、居ても立っても居られないのか船に乗って名瀬へ出かけていた。時には鹿児島まで行く、いちずな情熱が実り、「百合子と一緒に、島で暮らすから」

と聞いた時、勇三と和子は顔を見合わせて喜び、漁村の川沿いに保有する敷地に二階建てを建ててやった。

結婚式では親族や多くの闘牛関係者、漁師仲間と同級生に祝ってもらい、二人は新居で生活をはじめた。百合子は半年後には島内の病院に勤め、一緒になって三年目に男の子が誕生した。勇三と和子は大喜びで剛司と名づけ、百合

子の両親も招いて村を挙げて酒宴を開き、島唄や手踊りで祝った。百合子は一年の産休を終え、剛司を和子に預けて復職したが、早いものでその剛司も来年からは小学生になる。紗希の方は徳之島の闘牛に熱い男性と結婚したので期待していたが、夫の転勤で鹿児島市に住んで娘がいる。

勇三はいつもひと寝入りして、夕方には軽く柔軟体操を済ませ、牛を牛舎から曳きだしてトレーニングへ行く。今日は朋也が剛司を連れて来て和子と喋っている頃合いを見て、「行くぞ」と声をかけた。勇三が曳きだした一トンはある一撃龍号は力を出せる七歳で、鋭い突き押しを武器に前頭の下位から連戦連勝で、番付は小結まで上り詰めていた。朋也が世話をする戦闘龍号はまだ三歳五ヶ月で、鍛えて早く闘牛大会に出し、ミニ軽量級チャンピオンにしようと言つて鍛錬に力を入れている。徳之島には泉翁が持つ一トン二百キロもある巨岩のような、全島一チャンピオンの横綱南海一号がいる。これまで島内はもろん沖繩や新潟、四国から強豪が横綱を狙って来るが、一方的に退けている。勇三と朋也は南海一号にいつか持ち牛を対戦させ、荣誉に輝く夢を秘めていた。

一撃龍号と戦闘龍号の曳き運動は、坂を下り浜から岬まで片道八百メートルはある砂浜を往復する。それだけでもトレーニングになるが、十メートルはある坂を前にして勇三が一撃龍号に気合いを入れると、一気に勇三を引きずつ

て駆け上がる。専用の鍛錬場に入れるや赤土に顔や軀で荒々しくマーキングをし、大型トラックの古タイヤを三段積み重ねたのを突き上げる角突きなどで、パワーと持久力のある軀になっている。戦闘龍号も朋也が坂を上らせ、鍛錬場での運動は、勇三が見てもまだ甘えと遊びがあり、実戦にはもつと鍛えてこれからだと思っている。

勢子の仲間から技師と言われ還暦を過ぎた勇三は、朋也に後を託すため牛を扱う機敏な手足の動きを見せ、瞬時に勝負どころの判断、攻撃の間合や駆け引き、角かけ、押し込む、腹とりの技や、自分の体重をかけて軀や、頭と肩を押すタイミングなどを教えていた。

徳之島では本場所の全島一闘牛大会が正月に初場所、五月は春場所、十月には秋場所が盛大に開催される。勇三は闘牛連合会より、春場所に戦闘龍号と八重山号の対戦を打診された。戦闘龍号を実戦に出すのには一抹の不安はあるが、夜は近くに住む弟の正明を呼び、勢子で名を知られた叔父兄弟を招いて、意見を出し合ってもらった。

「これまで吾も稽古牛を探しているのだが、まだ牛を相手に角突きをさせていないだけに、初戦に負ければ臆病になるのが心配だぞ」

叔父が危惧していたが、

「それなら実戦を想定して、タイヤでの角突きをもつとさせなければいかん」

2

全島一闘牛大会春場所の前夜には、親族や応援団を招き酒宴が開かれた。話題は戦闘龍号のデビュー戦だが、相手は一勝の実戦経験がある八重山号だけに、

「待っていた慰みじゃが」

と言う長老や親族たちから朋也は、勇三の動きをしつかり見て勢子を務めるように、耳が痛くなるほど言われていた。勇三が背に昇り龍を染め抜かれた水色の法被を朋也に渡し、それを嬉しそうに素肌で羽織ると一斉に拍手があがった。勇三は稽古牛を相手に角突きをさせていないだけに、戦闘龍号がどれだけやれるか気になるが、

「朋也と戦闘龍号のデビュー戦だ。必ず勝つ、勝ちに行く」

周りに宣言すると、拍手と歓声があがる。

大会当日、朝から勇三と朋也は神社へ行って、勝利と安全を祈願した。

対戦するプログラムに、ミニ軽量級で戦闘龍号と八重山号の対戦が封切(初戦)に組まれていた。勇三は搬送用トラックに戦闘龍号と朋也を乗せ、佐武一族は叔父を先頭に佐武闘牛舎と戦闘龍号の幟を巡らした車を連ね、正明たちが「ワッセ、ワッセ！」と掛け声をあげ、午前九時には関係者指定広場へ来て、戦闘龍号を待機小屋に入れた。

と正明が言う。さして悲観的な意見は出ず、黙っていた朋也が口を開いた。

「大会まで一ヶ月もあるし、これからパワーをつければ押しの強さで立ち向かえる」

その意見を尊重して、対戦させることを決めた。

これまで闘牛大会で勇三は勢子の頭として、正明とベテランの叔父とで主に務めていた。朋也は漁に出て網上げの時に、右足を骨折したことがあり癒えても長らく助手で経験を積ませていた。最近の素早い動きを見極め、まして持ち牛でもあり戦闘龍号のデビュー戦では勢子で入ってもらうと伝えた。それを聞いて喜んだ朋也は、俄然張り切っている。勢子でやらせると言ったものの、心配の種は尽きないもの。勢子は危険が伴い一瞬でも気を緩められないだけに、大きな怪我をしないか不安が拭えなかった。その夜、食事を終えて焼酎を飲む勇三が和子に言った。

「いよいよ朋也のデビュー戦じゃが、初めての勢子は緊張して身体が動かんもんじゃ。それだけに心配にもなる」

「あんたの背中を見て育ったのだから大丈夫。もうすぐ二十六歳よ、足を骨折したからだらうけど、もつと早くても良かったはず」

和子は気持ちを見透かしたように言ってくれる。

翌日から朋也による戦闘龍号の鍛錬が激しくなり、大会が近づくとゆるめられた。

十時開催までの待ち時間、朋也は自分が育てた戦闘龍号のデビュー戦で初めて勢子を務めるだけに、気持ちが昂りじつとしておられないのか水を飲ませ、軀を見てまわっている。百合子が剛司を連れて、

「パパと、戦闘龍号のデビュー戦だよ。一緒に応援しよう」

と言って朋也の傍へ行くのを勇三が見遣ると、

「戦闘龍号とパパもガンバレ！」

剛司が元気な声をあげるのに、朋也が笑顔を浮べるの、緊張も解れたように思える。

対戦する十時が近づいてきた。叔父が焼酎を紙コップに注ぎ、朋也に渡した。それを口に含んで、戦闘龍号の軀に勢いよく霧状に吹きつけた。

「角を合わせるまで鼻綱を曳いて、ゆつくりと持っている。押させて秘めている闘争本能を引き出せば勝てる」

叔父が朋也をリラックスさせようと、アドバイスをしていた。

三千人収容の闘牛場からは、来賓や大会関係者の挨拶と、唄者が鳥唄をうたい、競技を盛り上げている様子が聞こえる。

勇三が、「さあ、行くぞー」と言う大声に、叔父と朋也は、戦闘龍号の綱を左右で握りしめた。ラッパが吹き鳴らされ、闘牛場へ向かう先払いには正明が立ち、応援団が威勢よく幟をうちふって「ワッセ、ワッセ！」の掛け声とチ

ズン<sup>太鼓</sup>を叩き、指笛を吹き鳴らした。

闘牛場の入口で正明が清めの塩を四方に撒いて闘闘龍号が入場するや、満席の掃鉢型スタンドから大声援が怒濤のように打ち寄せる。闘闘龍号はすぐ戦いを本能で感じとったのか、筋骨隆々とした七百十キロのはち切れそうな軀に闘志を漲らせ、地べたを前脚でカッカッと掻き、頭を低くして闘牛場入口に槍先のような角を向けて相手を待ち構えた。

ドドン、ドンドン、チジンを叩くりズムと指笛が吹き鳴らされる坂から、肩と背と尻が盛り上がり綱のような八重山号が、幟を掲げてラツパを吹き鳴らす応援団を引き連れ「ワッセ、ワッセ！」と勢いよく駆け下りてきた。

時間になり、大会封切の闘闘龍号対八重山号の対戦がアナウンスされた。

二頭の喧嘩牛が頭を上下にふり、ジリジリ角を合わせて互いの勢子が鼻綱をサツと抜く。ググツと軋む角を支点に頭がぶつかり、朋也が背の昇り龍をひるがえし闘闘龍号の肩を叩いて気合を入ると、八重山号を柵際に押し込んだが、反らされ肩に角を受け赤く滲んだ。闘いの緊迫感が刹那に上がり、スタンドの熱い大声援は波がうねるようにグラウンドへ押し寄せ、場に殺気がたつ。回り込んで闘闘龍号の横に立つ朋也の動きが固い。それが気になる勇三は勢子を代わり、「ハイヤー、ハイヤー」声を張りあげ、闘闘龍

てリングへなだれ込んできて、

「ワイド！ ワイド！ 我キヤ牛ワイド！」

歓喜の雄叫びをあげる。

「良くやったぞ、朋也！」

勇三は闘闘龍号のデビュー戦を朋也の勢子で勝ったのが嬉しく、声を張りあげて拳を突きあげた。周りでは指笛とチジンの叩くりズムにのって、

「ワイド！ ワイド！ 我キヤ牛ワイド！ 闘闘龍だ、ワイド！」

勝利を祝って佐武一族が踊りだす。勇三は闘闘龍号の背に乗った朋也に、リングに飛び出してきた剛司を抱き上げて渡すと喜んだ剛司が、

「ワイド！ ワイド！」

声をあげて炎天下の青空に両手を広げる。朋也の晴れ姿と剛司を見つめる和子と百合子も興奮して喚声のあがるリングで、

「ワイド！ ワイド！ 我キヤ牛ワイド！」

の手舞い足舞いの乱舞に飛び込んで踊っていた。

夜の祝勝会は朋也の晴れ舞台と闘闘龍号の初勝利を祝って、叔父の乾杯音頭で宴になり、満席の拍手をあげて朋也は腕を誉めたえられた。

「いい慰みじやったが、ありがとうね」

長老が言えば、

号に自分の体重をかけて軀を押す。彎曲した角をからませ

目を大きく見開く闘闘龍号は荒い息を吐き、渾身の力で圧力に耐えて脚を踏ん張っている。勇三が、「慌てるな！」と声をかけて正明と代わる。八重山号の尻から青緑の糞が下痢のように流れ、三分経過のアナウンス。黒い法被の勢子が白いスニーカーの右足で大地を激しく踏みしだき、「ハイヤー、ハイヤー」と気合を入れる。相手も勢子が代わり八重山号は気合を入れられたのに反応してガン、ガン、ガツンと頭を突き寄せた。叔父が勢子に入り、立て直した闘闘龍号の肩や八重山号の頭から血が滴り落ちる。勢子を代わった勇三は静まりかえったスタンドから、

「闘闘龍、ガンバレ！」

応援団の大声援を受けた。

押しに耐えて反撃する闘闘龍号に勝負時を感じた勇三は、朋也に勢子を任せる合図を送る。朋也が闘闘龍号に気合を入れると、軀を捻り鋭い角で顔面を突き、角をからめる。その頭を朋也が懸命に押すのに力を得た闘闘龍号は、八重山号を柵際にぐいぐい押しして追い込んだ。さらに角を首に向けたその瞬間、逃げる八重山号の角に勢子が綱をかけ、朋也と正明も素早く闘闘龍号の角に綱をかけて軀を反らした。実況アナウンサーが闘闘龍号の勝ち名をのり上げるや、息を飲むスタンドは大歓声につつまれた。声からして応援していた佐武一族が闘闘龍号の幟をふり回し

「朋也もこれで勢子としてやれる。勇三も立派な跡取りが育って安心じやろ」

叔父に言われた勇三は剛司と百合子の傍でにこやかな朋也を見て、これで佐武闘牛舎も安泰だと思えば何よりも喜びだった。宴が盛り上がり、三味線を弾きながら唄者の坪山豊が作曲したアップテンポな「ワイド節」になった。

ワイド ワイド ワイド

我キヤ牛ワイド 全島一ワイド

三京の山嵐

如何荒さあても

愛しやる牛ぐわに

草刈らじうかりゆめ

ウーレ ウレウレ

手舞んけ 足舞んけ

指笛吹け 塩まけ

ウーレ ウレウレ

我キヤ牛ワイド 全島一ワイド

闘牛の唄に皆が立ちあがって踊りだし、最後に宴をしめる。六調の浮き立つリズムにのり一人一人が手踊りを繰り出してお開きになった。

七月に入りフィリピン沖で台風が発生した影響で、雨風が激しくなりはじめた。奄美群島は台風が発生すればほとんど上陸するので、台風銀座と言われている。勇三は朋也と漁船にウインチを掛けてアタンの繁る浜に引き揚げ、正明の船と一緒にガジュマルの樹にロープで左右から張り強風に備えた。

「親父、戦闘龍号をたのむ、気をつけて帰ってなあ」  
朋也から別れぎわに掛けられた声が風にちぎれる。

勇三と正明の家は漁港から歩いて四、五分ほどの丘にあった。勇三はびしょ濡れで帰るなり台風に備えている棧やベニヤ板を床下から取り出し、家の雨戸や窓の枠にはめ込んでロープを掛け牛舎へ向かった。一撃龍号と戦闘龍号の広い牛舎を手早く掃除をして、水と餌を与え、戸締りを確認して裏の木戸口から土間に入った。

「あんた、身体が冷えたでしょう。風呂が沸いているよ」  
和子が準備してくれていた。最近は何のせいか雨に打たれると身体が冷えるので、肩まで湯につかる。温もって出窓を押しあげると吹きつけられた雨粒がしぶき、庭の大きなガジュマルの枝葉が風に巻きつけられてしまっていた。

ラジオの台風情報では、石垣島に上陸した台風三号は予定どおり進路を奄美群島へ向けている。徐々に荒れる海か

んが止み、それとともに風雨も衰えてきた。

五時、少しずつあたりが白みだしたころ、電話がけたたましく鳴った。朝食の準備で台所に立っていた和子が、手を拭きながら受話器を取るのが勇三に見えた。

「えつ、漁村が！ ハイハイ」

受け答える和子の声が緊迫して裏返っている。

「漁協からだけれど、川が氾濫して漁村が大変よ！」

顔色を変えた和子の話では漁村が浸水しているようだが、それ以上のことは不明だ。朋也の家族が気に掛かり勇三が飛び出して行こうとすると、

「待つてよ、あんた。私も行くから」

引き止める和子が台所でコンロの火をバタバタ消すのを待ち、勇三は和子と外へ出た。散乱している木の枝葉を避けて、勇三が足元の注意を促す後から、和子が雨靴の音をたててついでくる。

漁港へ向かう坂を下りた。

朝陽に照らされた漁村に目を遣って驚愕した。

切り立つ山の斜面が大きくえぐられ、赤土の地肌がむき出しになっている。土石流で川はせき止められ、川沿いの家は数軒流されていた。

勇三は漁村の無残な跡を見て立ち竦んだ。

「ワッ！ 大変だわ」

和子は悲鳴を上げ、顔は血の気が引いている。浜に引き

らの轟きが聞こえ、風雨が激しくなりだして意外に今度の台風は上陸が速い。和子と食事を摂りながらトタン屋根を激しく叩く雨風の音に、

「和子、今夜は荒れるぞ」

勇三が言うのはいつものこと。

「食料は充分だけど、早く抜けてくれたらいいのにね」  
早々と備えている和子もさして慌てる様子もなく、食べた食器を持って立ち上がった。しばらくして電話が鳴った。  
「そっちは大丈夫なの？」

その電話の声と笑い声からして、相手は朋也のようだ。

翌日の朝方、徳之島に台風三号が上陸して、漁港から荒れ狂う波の咆哮が駆けあがってくる。ラジオの情報で台風は停滞する模様で、夕方になっても抜け去る気配がない。

村の放送からは雨量が多く、土砂崩れや川の増水を警戒するよう繰り返し注意を促している。

朝方に少し弱まった風雨を通して、警報が鳴りはじめた。飛び起きた勇三はすぐ消防団に電話を入れたが、いっこうに掛からない。胸騒ぎがして朋也に電話を入れるが、固定電話も携帯でも繋がらない。和子も傍にきて案じるので、ラジオのスイッチを入れたが、台風三号の動き出した情報だけで、他の様子は掴みようがなかった。漁村を確かめに行きたいが、まだ風雨は強く外は危険で、風が弱まるのを悶々と待ち、時計を見るとすでに午前四時だ。サイレ

上げた正明の明神丸はあるが、勇三の龍神丸と港の道筋にあつた家屋や漁協も、跡形もない。上流の山間に架かる橋は崩れ落ち、朋也の家は川から三十メートルほど離れており、土石が流れた道筋の端だが、それでも家に濁流が流れ込んでいくようだ。泥にまみれた家々では、消防団や青年団と村人たちが土砂を懸命に掻き出し、救助活動を行っている。それを見て勇三が、

「先に行くぞ、後から気をつけてこいよ」

和子に言うや足を速め、朋也の家へ急いだ。泥だらけの中で消防団員が作業をしている裏庭では、着のみ着のままの百合子と剛司が茫然としてうずくまっている。遅れてきた和子が、百合子と剛司の傍に歩み寄りそこには、朋也がいない。勇三が朋也の家を覗くと、一階には巨大な岩石と土砂が流れ込んでいる。それを見て勇三は矢も楯も堪らず、百合子の傍で朋也のことを尋ねる和子との会話に聞き耳を立てた。

「朋ちゃんが、一階で巻き込まれたの」

虚ろな目の百合子が言う。

朋也は轟音で家が激しく揺さぶられるのをいぶかり、二階から様子を見に降りた時、一気に窓や壁を突き破った土石流に呑み込まれたようだ。異変に気づいた百合子が、階段から暗い階下へ向かって朋也を懸命に呼んだが返事はなかったと言つて泣き崩れた。

勇三は駆け付けた叔父と一緒に土石を掻き出す救助作業に入り、和子はへたり込んだ百合子を抱き起こし、剛司を連れて家に向かった。海上では流されたと思われる村民の捜索に正明たちが残された船を出しているが、その日の昼ごろ、裏口から逃げようとしたのだから、泥にまみれた朋也の遺体を消防団員が見つけたのだ。

勇三は葬儀の手筈を済ませ、鹿児島から駆け付けた紗希の家族を空港で迎えた。紗希は家に入るなり声のない朋也の胸をゆさぶって泣き崩れ、和子に抱きしめられている。参禍に遭った百合子はほとんど寝ていないと思われ、剛司には百合子の両親がつきつきりだった。勇三は崩れそうな身を鞭打って、叔父と海上の捜索から帰ってきた正明に後を託して牛舎へ向かった。――親父、戦闘龍号をたのむ、気をつけて帰ってなあ。と最後の声が耳にこびりつき、胸を締め付けられながら啼いている牛の世話を済ませた。

告別式には闘牛関係者や漁協関係者、漁師たち、百合子が勤める病院の関係者、島に残っている同級生や友人たちも大勢参列して朋也の野辺送りを終えると、勇三はすぐ正明と離れを片付けて百合子と剛司を住まわせた。紗希の夫は葬儀を終えて帰ったが、子供を連れた紗希は二週間も家族を支えて正明の妻の千寿と家事をこなし、百合子を励ましていた。紗希にはいつまでも欲しいが、和子が家事

まで覚える。和子の声も聞こえにくく、大声で呼ばれて気づくありさまで、ぼんやりしている日が多くなる。正明が案じて自分の漁船に乗らないか、と誘ってくれるが、その気になれず、抜け殻のような勇三に、「しつかりして、紗希が哀しむわ」と眉をひそめる和子も、朋也を喪って懸命に耐えているのはわかっていた。

打ちひしがれた勇三に牛の世話が大変なのを見越した闘牛関係者が、一撃龍号と戦闘龍号を譲って欲しいと引き合いに来る。だが佐武闘牛舎としての誇り、朋也と手塩にかけて育てただけに断っていた。これまで身体の動かない勇三を案じて、正明が毎日訪ねてきて牛の世話を黙ってやってくれる。勇三は、その温情に甘えているばかりで、父親を喪った剛司からも「お爺ちゃん、大丈夫」と、けなげに声を掛けられても、立ちあがれない。自分の精神の脆弱さに、情けなくて顔もあげられなかった。

正明が牛のトレーニングを終えて帰った夕方、ふらふら歩いて牛舎へ行った。薄暗い柵沿いに人影がある。目を凝らすと和子がすすり泣き、朋也の戦闘龍号にブラシを掛けながら何やら語りかけている。勇三にはその話し声は断片にしか聞き取れなかったが、気持ちがわかるだけに、我が身を恥じてそっと踵を返した。

翌日はいつものようにふる舞う和子を見た勇三は、なえた気持ち奮い立たせ、一撃龍号を正明にまかせて戦闘龍

もあることだし気遣って帰るよう促した。紗希は心残りだったようだが、翌朝は朋也の位牌を前にして、

「これからの佐武闘牛舎を背負う兄ちゃんが亡くなったのは悔しいけど、お父さんとお母さん、皆と力を合わせて闘牛も頑張つてよ。また折をみて来るから」

勇三と和子に言い残し、百合子を励まし鹿児島へ帰った。紗希が帰って間もなく台風四号が発生して中国の方へ逸れたが、五号は近づいてくる。台風になるといやがおうでも朋也を喪った惨事が思い出され、立て続けの上陸で哀しみの覚めやらぬ百合子と剛司が案じられた。

「あんた、こんな時だから二人は母屋で過ごしてもらいましょう」

和子が呼び寄せて夕餉を摂り、五号が抜けるまで一緒に過ごしていた。

その後、喪に服する百合子は休みを取って剛司と過ごしていたが、四十九日の法要を終えて勤めに行きはじめた。

勇三は百合子と剛司の手前、気落ちした素顔を見せまいとしていたが、日が経つにつれてどうしようもない喪失感に襲われてくる。漁村に家を建ててやった自分を責め、もっと早く勢子もやらせていたらと悔やむ。気を紛らわせようと焼酎をいくら飲んでも酔えず、眠れず、根が優しかった朋也との日々が細切れに思い出される。最近山が崩れる悪夢にうなされ、左耳はふさがったような圧迫感と耳鳴り

号を曳いた。正明が心配していたように途中で曳いているのか、曳かれているのかすらあやふやで、足元がふらついて自在に操れず、正明の助けを得てどうにかこなした。

その後も正明と一緒にトレーニングを務めていたが、ある日、急な雨に打たれて帰り、牛舎に入れた後はぐったりしている。和子に病院での検査を促されて一緒に行った。内科では異常は見られず、耳鼻咽喉科へ回され、検査の結果、聴力レベルが平均値より極端に落ちていて、滲出性中耳炎の症状を告げられた。風邪を引いたわけでもないし、焼酎を飲み過ぎたのか、それよりも朋也を喪った精神的ショックから起きた症状かもしれないと思った。その後は耳鳴りにも悩まされて難聴になるのを恐れ、毎週治療に通っている。

一月ほど経った夕食時に、和子から今後の事を話しかけられ、もう牛を手放したらと言われたのが、胸に深く突き刺さる。手放した後を考えれば、船を入れて漁に出る気力もなく、これからの生きる価値すら見えない気がする。だが先祖代々の『佐武闘牛舎』を俺の代で終えるわけにはいかない、と考えたすえ一撃龍号を正明に託して、朋也が育てた戦闘龍号を手元におくことを話して和子も納得してくれた。勇三が戦闘龍号の世話をやりはじめること、

「爺ちゃん、ぼくも手伝う」

と、剛司が言う。父親が飼育した牛と知っているだけに、



勇三について回り、かえって捗らないが餌の草刈りも手伝い、牛を怖がらず懸命に箒をもって牛舎の清掃までやる。

剛司が小学生になると、勇三が牛舎から戦闘龍号を曳き出す頃には、遊んでいても帰ってきて、一緒に綱を握ってついてくる。剛司は岬までの砂浜を戦闘龍号に声をかけながら曳き、急坂のトレーニングでも綱をとりたがる。その様子を見て幼い頃の朋也が思い出され、勇三は目頭を熱くしながら自分を奮い立たせた。

4

正明に託した一撃龍号は期待どおり関脇まで昇り詰め、平土野闘牛場の地方場所まで七連勝と勢いのある大関天城一号に挑戦する。勇三はこれまで自分の手で育てただけに気がかりで見に行くと、一撃龍号はその日に備えて、急坂を上るトレーニングと、鍛錬場でのマーキングや古タイヤ突きが激しくなっていた。大会が近づいてトレーニングはゆるめられたが、一トンもある軀が引き締まり、正明が角の粗研ぎをやりだすと、闘争本能を漲らせて啼き声をあげる。前夜祭の土曜日、本場所の対戦ではないが、天城一号を倒せば全島一チャンピオンを狙うチャンスがあるだけに、親族はもとより闘牛関係者たちが、手には焼酎や豚肉に果物などを提げて正明の家に集まっていた。長老の乾杯音頭

「今日はゆっくり休んで下さい」

すぐに菓を飲まされ、和子が帰って来ると、二人は出て行った。

闘牛大会から帰って来た剛司に元気がない。

「お爺ちゃん、一撃龍号は天城一号を押しまくっていたのに負けたよ」

悔しそうに話すのを聞き、「次は必ず勝つ」と慰めると、笑顔を浮かべたのでほととす。夜は正明が千寿と一緒に見舞いに来た。

「兄貴、一撃龍号に黒星はついたが、押し込んで揉み合った時に角が肩に刺さり、傷が心配で吾が止めたので、力負けしたわけじゃないんだ」

期待されていただけに無念なのだろう、珍しく強気な報告をし、

「明日は吾の車で病院に行こう」と気遣って帰って行った。

朋也の一周忌に紗希は夫と三歳になった娘と一緒にやってきた。法事を終え納骨を済ませて家族だけになった夜だった。紗希が朋也のことを百合子と話している時に、

「この島を離れて、名瀬に住む両親の元で剛司を育てたい」と、百合子が言い出したので、皆が驚いて顔を向けた。「仕事をしている時には、夫のことを思い出さないけど、

で宴が始まり、並べられた料理に箸をつけながら、

「正明、相手は強いが勝てば大関だぞ」

長老から発破をかけられる。大勢が興じている部屋は、これまでの戦績を示すカップや優勝旗に、佐武闘牛舎の幟と一撃龍号の写真も飾られている。気の早いことに大関のタイトルをとり、泉翁の横綱南海一号と角を合わせるのが話題で盛り上がっていた。

大会当日、勇三は朝から身体が熱っぽく、膝がガクガクするので寝床に坐り込んでいると、食事の支度をしていた和子が傍に来て、

「汗ばんでいるけど、風邪を引いて熱があるんじゃない？」額に手をあて、和子が体温計を持って来て測ると三十八度二分もある。すぐタオルで身体を拭き、下着を着替えた。

「今日は応援に行きたいでしょうが、安静にしていって下さいよ。正明さんには事情を話して来るし、戦闘龍号は私が浜に連れて行くから」

と和子に言われ、横になり目をつぶった。

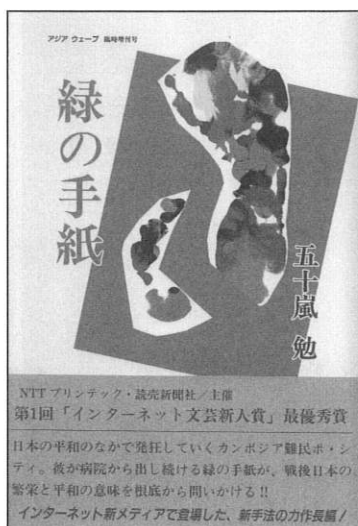
正明の家から親族や応援団が駆けつけて、チジンを叩く賑わいが聞こえてくる。勢子は断っていたが、肝心な時に一撃龍号の応援に行けないのは情けない。和子から聞いたのか百合子と剛司がやって来て、

「お爺ちゃん大丈夫か、僕が応援を頑張るから」

と剛司が言ってくれる。百合子が体温と血圧を測り、

この徳之島にいる限り海と山や町の、どこへ行っても夫との日々がよみがえり、台風発生の報を聞くとあの日を思い出して怖くて、混乱して、私は自分自身を見失いそうになるの」

泣きながら打ち明けた。身しろぎもせず聞いていた皆は、声もなく黙り込んだ。勇三はいつも明るくふる舞う百合子が四人揃った夕餉の折り、時々沈み込んでいるのが気がかりで、耐えているのは分かっていた。だが、本人から直接苦しい胸の内を明かされると言葉がない。二週間前の夜に和子と食後、百合子の先行きを話し合ったことがある。和子は、いつまでも一緒に暮らしたいが、百合子はまだ若いし、良縁があったら幸せになってもらわなければと話す。再婚すれば剛司も姓が変わるだろうし、『佐武闘牛舎』を正明に託すことも考えなければと思った。あれやこ



カンボジア難民の悲劇を描く  
1700円(税込/送料共)  
御注文はアジア文化社まで

れや考えて気持ち揺れる勇三は、両親と暮らす話を切り出されてみると、それも百合子の選択肢だと思いが、剛司を中心にした団欒もなくなり、生きる望みまで失われそうな気がする。だが百合子の気持ちも分かるだけに、引きとめる手立てもなく、

「船でも飛行機でもすぐ行き来が出来る、時々顔を見せてくれよ」

と、さも理解するような口ぶりで言うのがせいっぱいだった。うつむいて必死に耐えている和子の手を、紗希が握りしめている。

明日は百合子と剛司が島を離れるという夕方に、家族で朋也の墓参へ行った。

墓前にぬかずく百合子が長い間、手を合わせているのを見守った。墓参を済ませた勇三たちは、静寂な墓地から東シナ海の海原を黙って見つめていた。水平線には黄金色に輝く太陽が円い輪郭を際立たせはじめ、徐々に真っ赤になり、空とたわむ海の狭間に巨大な炎の球体がぼつかり浮かんだ。やがて沈む太陽は島人が神の領域と仰ぐ、朋也の旅立ったネリヤカナヤの空を、赤いハイビスカスの色に染めはじめた。

百合子が小声で、

「私がここを離れるのを許してくれるかしら」

と言うそばには、紗希が寄り添っていた。

食事を拵えている。

草を刈り戦闘龍号に食餌を与えた勇三は、思い立ったようにこれまで長い間足が遠のいていた漁村の方へ向かった。朝の陽射しを浴びる山道には、ハイビスカスのピンクや赤い花が咲いていた。波打つサトウキビ畑をぼんやり見ながら歩き、多くの村人が犠牲になった漁村と港が見えると、胸の中に澱んでいた記憶が立ち現われ激しく渦まいてくる。

川の上流は山の斜面が抉れた跡が生々しく、見上げる頭上には真新しい吊り橋が架かっていた。無人の漁村には五軒の空き家が残っているが、他は跡形もない。郵便局は看板が垂れ下がり、潮風にゆれてカタコト音をたてている。朋也の家は解体して更地にしたが、敷地に足を踏み入れたとたん、身体が硬直して唇は震えだし、何か得体の知れない力に捉われた。朋也の無念さを全身で感じる勇三は、陽射しがあふれる地に平伏して、

「朋也の魂が迷わんように、どうか導いて下さい。尊尊我無、尊尊我無」

と、一心に神々に祈りを捧げた。どれぐらい時間がたったのだろう、身が軽くなった勇三は家屋の残る川べりへ向かった。

あの時、海へ流されたと思われる住民の捜索に正明たちは船を出したが、二人の遺体しか揚がらなかった。十二人

夜は、叔父や正明夫婦に親族や親しい人たちが集まり、別れの酒宴になった。宴が賑わい始めると剛司が言った。「爺ちゃん、ぼくは大きくなったら勢子になる。勢子になるよ」

それを聞いて、皆の目が剛司に注がれた。

「オオ、兄貴、楽しみじゃが」

正明の声に胸を熱くした勇三は、和子や紗希のほころぶ顔を見て焼酎をあおった。

会話が途切れがちになると、正明が三味線をつま弾き、千寿が鳥唄をうたいはじめた。宴が盛り上がり闘牛の（ワイド節）で皆は立ちあがって踊り、最後は賑やかな（六調）を正明と千寿のうたう軽快なリズムにのり、一人一人が手舞いに飛び出した。百合子は涙を流しながら剛司と踊り、押し出された勇三と和子は涙をこらえ、紗希夫婦も引つ張り出されて踊っていた。

翌日の勇三と和子は正明夫婦と一緒に亀徳港から百合子と剛司を先に送り、空港から紗希たち家族を見送った。

暑さもやわらいで来た十月、これまで百合子と剛司の声が聞こえた離れの家はがらんとして、物音ひとつしない侘しさに勇三と和子には眠れない夜が続いた。寝転んで闇を見つめていた勇三は、朝方とうとう寝込んでしまい、オーストンオオアカゲラの木をつつく音で目覚めると、和子が

の犠牲者が出た漁村は再建の見込みもなく、残された家々には板戸が打ち付けられていて、庭先には投げ出された雨戸が朽ちている。

土砂を浚えた川の対岸に渡り平屋の家を覗くと、生活の名残がある家財道具や、庭の洗濯干場には竿が転がったままで、その側に置き去りにされた赤い三輪車があり、滑り台が錆びている。そこから漁村の子どもが、「パパ、ママ！」と呼びかける声が出て、百合子が剛司を抱き上げる姿と、朋也の笑顔が重なってくる。

長年暮らしていた漁村で、家族を奪われた人々は島内の町村や、名瀬に移住したり者もいれば、島を離れて沖繩や本土に渡った者もいる。生き残った人たちは平穏な日々を懐かしがり、この里へ慰霊のために訪ねて来るのだろうか。



明治文学の草創期に彗星の光芒を放って文芸批評の先駆をなした若き文学者斎藤緑雨。樋口一葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っているのはあなたの大成です」と率直にぶつけた早世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家がここに蘇らせた。畢生の「斎藤緑雨」文芸評論集。

1512円（税込／送料共）  
御注文はアジア文化社まで

\*沖繩の「ニライカナイ」と同じ。遙か遠い東の海の彼方、または海の底、地の底にあるとされる异界。豊穡や生命の源であり、神界でもある。年初にはニライカナイから神がやってきて豊穡をもたらし、年末にまた帰るとされる。また、生者の魂もそこから来て、死者の魂もそこに去ると考えられている。

ハイビスカスの黄色い花が咲いている広い庭を見ながら歩いていると、海辺から潮風が吹きつけてきて花々が立ち騒ぐ。台風が発生すれば頻繁に上陸する島だが、これほどの土石流による大災害は初めてのことに。結婚して漁村の近くに住みたいと言う朋也のため、喜んで新居を建ててやっただけに、言葉もない。

棧橋の漁協跡に佇んで、ガジユマルの繁っていた砂浜に目を遣ると、土砂でなぎ倒された根元から生命力に満ちた茎が枝葉を伸ばしていた。龍神丸が流された辺りは、網と漁具が土くれにまみれている。砂浜へ来て坐り込めば、朋也が高校生の頃ここでうずくまっていたのを嫌でも思い出す。あれは百合子が名瀬の学校へ転校するため、島を離れた日だった。僕も名瀬の学校へ行きたい、転校したい。と言っていたあの時、何と言って励ましたのだろう。声を掛けて相撲を取ったのは覚えてる。ぼんやり海に目を投げていると、朋也が戦鬪龍号で勢子を務めた晴れ舞台での動きがひとコマずつ思い出されてくる。ふと、人の足音にふり返ると和子だ。

「どこに行ったのかと思って、正明さんと千寿さんで手分けて捜し回ったじゃないの」

和子が咎めながら傍に坐った。ひとしきりして、  
「あんな、朋也に先立たれ、悔しくて辛すぎるけど、孫もいるのよ」

早いもので、もう四年生になると思えば、感慨深い。百合子からの電話で剛司は運動神経だけはバグゲンで、勉強は普通。相撲が強くてかつて徳之島から大相撲の世界に入り、横綱になった朝潮太郎を目指せと先生に言われていると話す。それもまた頼もしいことだが、百合子と剛司が徳之島を離れる酒宴で、ぼくは大きくなったら勢子になる。と剛司が言った言葉が脳裡にこびりついている。朋也の三回忌に剛司が百合子と来た時も、すぐ牛舎に走り戦鬪龍号の世話をやき、鬪牛の話になれば眼の色を輝かせていた。それを見て血は争えないものだ、勇三は嬉しかった。将来は勢子として朋也の法被を羽織らせてやりたい。百合子の意向もあるはずで、口にくそ出さないが、内心では『佐武鬪牛舎』を背負って欲しいと密かに期待もしている。

この五月の全島一鬪牛大会は、連戦連勝で関脇を張る朋也の戦鬪龍号を出場させ、正明と叔父と弟子の勝弘に勢子を任せる。それを和子から聞いた百合子が、すぐ剛司を応援に行かせる電話を掛けてきた。  
これまで来る時はほとんど百合子と一緒にだが、和子は名瀬まで迎えに行つたこともある。今回は一人で船に乗って応援に来るのを知り、小学生の一人旅を勇三が案じると、百合子が航海士の従弟に頼むので大丈夫と言っていたそう。和子は剛司が来るとなれば、まだ一か月もあるのにその日を心待ちにして、そわそわと迎える準備をしている。

「わかっている。わかっているのだ。和子には気苦労をかけているが、吾も鬪牛一筋に生きてきて、この年になり時々心が折れそうになる」

「そんな気弱いことを言って、ネリヤカナヤで安らぐ朋也が嘆くわ。あんなは誇り高い佐武鬪牛舎の勢子じゃないの」  
頬を濡らしながら励ます和子の手を、勇三は黙って握りしめた。

「朋也と紗希もこの島の海や山で過ごし、子供のころから鬪牛に一喜一憂して育つた誇れる子供たちよ。朋也は不運な災害に遭つたけど、たくさんさんの思い出を残してくれたわ。紗希からも二人目が授かったと嬉しい知らせがあったじゃないの。出産には早めに帰って来るはずで、孫が三人にもなるのよ」

和子の言葉に頷き、目は遠いネリヤカナヤを見つめていた。しばらくして、「兄貴、ここにいたのか」と言って正明と千寿が傍にきた。

5

百合子と剛司が島を離れて三年が過ぎた。

風の吹き抜ける広間で寝転んでいる勇三は、剛司が誕生した時、思いやりのある強い男にと名づけたので、成長を楽しみにしている。

剛司が来るのを知った叔父と正明がやってきて、

「叔父が足を痛めたので、兄貴が頭で勢子をつとめてくれ」と正明が言い出した。

「吾は足首を捻挫して病院通いじゃが勝弘は務める。勇三、勢子をたのむぞ」

叔父が言う。「まだ日数もあるんじゃないですか」と言うのに下りるのは、花を持たせる気遣いと思われるが、身体を動かしていないし、朋也を喪つてから勢子もやっていない。また鬪志も湧かないだけに返事を渋ると、

「剛司が来るそうじゃないか、そのために勝たせてやらんば」

叔父に肩を叩かれて励まされる。もう六十六歳になり戦鬪龍号の曳き運動だけでも息が切れて足がもつれ、もう勢子の機敏な動きは無理だとも思っているのだ、

「身体が動かんし、もう年には逆らえん」と言うのだが、「なにを弱気な、佐武一族の勢子らしくもない」と叔父に叱咤され、正明からも顔を合わすたびに促される。食事時に和子から、

「あんな、老いへ反逆して晴れ姿を見せてよ」

と、期待する目を向けられ、寄つてたかつて上手く乗せ、奮い立たせようとしている。そう思いながらも、笑顔を浮かべた。翌日から戦鬪龍号を曳き出して和子に見送られ、トレーニングを終えた勇三は、これが最後の勢子だと決意

して砂浜で身体を解し、少しずつ腹筋と腕立て伏せに加え、軽くランニングをやりはじめた。

闘牛大会の前日、勇三と和子は剛司を迎えに早くから亀徳港で船を待っていた。

定期航路の大型船が接岸すると、リュックサックを背負って、タラップから降りてくる剛司は背丈も伸びて大きくなっている。手を振りながら走って来るのを、勇三と和子が抱きとめ、「よくひとりで来られたねえ」と和子が笑顔で迎えた。

その日、勇三が戦闘龍号の角ときをはじめると、闘うモードに入るのを剛司は間近で身じろぎもせずに見ている。

夜は寢床に入って剛司の寝息を聞きながら、

「剛司はますます朋也に似てきたわねえ」

と言う和子の呟きに、勇三は頷いた。

「後を継いでくれたら張り合いもあるのじゃが、無理強いは出来ないしなあ」

と、勇三は言つて思いにふける。

「剛司はやる気だわ、期待できるかもよ。紗希も男の子が授かって、将来は夫と島に帰り闘牛に拘わるのを望んでいるし、あなたもまだまだ頑張らないと」

和子は自分自身にも言い聞かせたのだから、長年連れ添った夫婦だけに、気持ちには痛いほどわかる。剛司への期待と紗希夫婦がいずれ帰ってくると思えば、これからの生

き甲斐になる。

全島一闘牛大会の朝を迎えた。

闘牛場では対戦が進み、閃脇戦闘龍号と小結黒潮一号の一番になる。

勇三は気合いを入れ、捻り鉢巻きを締めた。

剛司はそのまま勢子をやりかねない勢いで、正明とトンはある戦闘龍号を曳いて闘牛場へ向かう。その後には佐武闘牛舎と戦闘龍号の幟を手にした一族の応援団が戦闘龍号を取り巻いて「ワッセ、ワッセ！」掛け声を張りあげ、チジンを叩き、ラッパや指笛を吹き鳴らす。戦闘龍号は声援の中を悠然と闘牛場へ向かい、入口で先払いの叔父が気合いを入れて塩を勢いよく撒いた。

「戦闘龍、お爺ちゃん、頑張れ！」

剛司が声援を送り応援タオルを振り回して、和子とスタンドへ向かった。

正明が戦闘龍号の綱を握りリングを一周させ、勇三は綱を渡された。戦闘龍号は相手が入場してくる坂を見上げ、闘志をかきたて鼻を鳴らしはじめ。ラッパが吹き鳴らされる坂から、指笛とチジンを叩く音と応援団が「ワッセ、ワッセ！」の掛け声を張りあげ黒潮一号が入場してきた。戦闘龍号の眼が赤く充血して、戦う態勢に入り、角をふりはじめた。

二頭の喧嘩牛が頭を上下にふり、ジリジリ角を合わせ、相手の勢子と勇三が鼻綱をサッと抜いた。ググッと軋む角を支点に軋がぶつかり、勇三が法被の昇り龍をひるがえし気合を入れる。戦闘龍号が黒潮一号を柵際に押し込んだが、かわされ肩に角を受けた。血が滴り落ちる戦闘龍号の傍で、「ハイヤー、ハイヤー」と気合を入れ、勝弘と勢子を代わる。互いに荒い息を吐きながら重心を低く、角をかためて押し合い、苦しそうな戦闘龍号が圧力に耐えて少しずつ右に回り五分経過。白に赤の縁取りの法被をひるがえした勢子が、「ハイヤー、ハイヤー」と肩を叩き、それに応じた黒潮一号は二度三度と頭を低くして戦闘龍号を突いて、押す。それを見て正明が勢子に入り、押される戦闘龍号の肩に手を添えて懸命に支える。スタンドの人波が熱く傾き、指笛と観衆の声をからした声援が飛ぶ。すかさず勢子に入った勇三は、和子と剛司のためにも「すつとこれ。ハイヤー！ ハイヤー！」と気合を入れ右の素足で大地を激しく踏みしだく。相手の勢子が入れ替わり黒潮一号に自分の体重をかけると、ぐいぐい押されて後ずさりする戦闘龍号は砂埃を巻きあげ四つの脚で踏ん張って耐え、巧みに回り込んだ。劣勢の戦闘龍号に勇三が体重をかけて軋を押しすと、余力をふり絞って頭から黒潮一号にぶちかまし、首から肩を連続して突き立て肩が赤く朱に染まった。さらに勇三が肩を叩いてたたらを踏むのに反応して、頭を低くかま

えて角を腹に向けた瞬間、黒潮一号が柵沿いに逃げる。正明と勝弘が素早く戦闘龍号の角に綱をかけた時、勇三は全身が喜びに満たされた。

熱狂した応援団が戦闘龍号の幟やタオルをふりまわし、耳をつんざく大歓声と、

「ワイド！ ワイド！ 我きゃ牛ワイド！」

氣勢を挙げながら一気にリングへなだれ込んだ。チジンを叩き指笛の鳴りひびく中で、勇三は剛司を戦闘龍号の背に乗せた。

「ワイド！ ワイド！ ぼくは必ず勢子になる」

喜んだ剛司が太陽の光を燦燦と浴び、満面の笑顔で拳を突き挙げる。勇三は朋也に生きうつしの姿と雄叫びに、胸が熱くなってきた。応援団が幟を打ち振り、

「ワイド！ ワイド！ 我きゃ牛ワイド！ 戦闘龍だ、ワイド！」

の手舞い足舞いで歓喜の乱舞の中に和子も入っていた。

勇三は長年勢子を務め、家族と一族に背中を押された最後の花道を、朋也が手塩にかけ、横綱を目指す戦闘龍号で勝てたのが嬉しく、息も荒く波打つ戦闘龍号の首や肩をなでた。

闘いを終えてわが身を考えれば、滲出性中耳炎の方は治ったが耳鳴りは相変わらずで、もう勢子は潮時で思い残すことはない。剛司がいつかリングに立てば、朋也の法被

## 第15回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

## ●●募集要項

**募集内容** ●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

**応募資格** ●2022年4月30日時点において40歳以上の者

## ●●応募規定

2万字以内（400字詰原稿用紙50枚以内）（短いものでも可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の大きさの原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募（コピーを応募するのが望ましい）。

別紙に①応募部門（第15回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム／それぞれふりがなをふること④年齢・生年月日・性別（これらのないものは失格とする）⑤〒（必ず記入）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

**応募審査料** ●2800円分の郵便為替（郵便局で購入／無記入のこと）で同封。外国からは26USドル。

**応募先** ●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

**賞** ●銀華文学賞 ■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

優秀賞 ■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合2万円）

奨励賞 ■賞状・賞メダル 佳作・入選 ■賞状

**選考委員** ●作家集団「塊」メンバー

**締切** ●2022年4月30日（当日消印有効）

**発表** ●予選通過者は2022年9月25日発売の「文芸思潮」85号に発表する。受賞作・優秀作は2022年12月25日発売の「文芸思潮」86号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

**主催** ●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。



を羽織らせるのが夢で、そのためならガタのきた身体をまだ張れる。これから闘龍号は横綱のタイトルを狙うチャンスがあり、ひと踏ん張りする気力も湧いてきた。今夜の宴は闘牛一家として誇らしく、久しぶりに心底から酔える気がした。

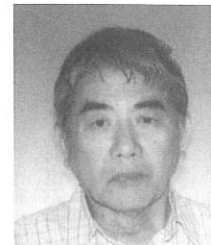
## 銀華文学賞 受賞の言葉 勢隆二

この度、最優秀賞の通知に驚くとともに、何度も見直し、選んでいただいた選考委員の方々には、心からお礼を申し上げます。

私は詩を学んでいたのですが、家族の不幸ことから書けなくなり、その後、小説らしきものを綴り始めました。

ある方に、「泥臭い作品だったと思います。」「君に小説は書けないよ」と言われたのを機に発奮し、書き続けて来ました。今回の受賞は私に矢を放った、今は亡き方にも感謝の思いで報告を致します。

私は一時期、奄美大島で育てられたので、主にその地を題材にしていますが、さらに精進して地道に書き続けていきます。



勢隆二

せいりゅうじ

1941 鹿児島市生まれ  
鹿児島工業高等学校卒  
大阪文学学校修了  
大手製造業定年後現在  
大阪府柏原市在住

『詩社』編集委員  
『さんか』編集委員  
著書 詩集『風と海と星を数えて』  
詩集『尖塔の東』